『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』第四十六号　抜刷（二〇一九年十月）

【資料紹介】

松平造酒助江戸在勤日記

―元治二年正月十一日より慶応元年閏五月九日―

根本佐智子
古宮雅明

【資料紹介】

松平造酒助江戸在勤日記

―元治二年正月十一日より慶応元年閏五月九日―

根本佐智子
古宮雅明

【キーワード】
松平造酒助　庄内藩　元治・慶應年間　江戸市中取締　新徴組

【要旨】
当館所蔵「松平造酒助江戸在勤日記」の翻刻。筆者松平造酒助は庄内藩士、家禄は千四百石。元治元年八月より慶応元年八月まで江戸に在勤している。
今回掲載分はは元治二年正月十一日より慶応元年閏五月九日まで、全五十綴のうち、「二十二」～「三十九」。この間、四月七日には慶應と改元があった。第二次長州征討が実施され、政情は緊迫の度を増すが、江戸市中取締の任にあった庄内藩はこれには従軍せず、家中は比較的落ち着いている。造酒助にも余裕が生まれ、正月頃からは挿絵も丁寧に描かれた彩色画が多くなる。花見の様子を描いた挿絵（図14・15）は爛漫の桜の下での遊興や、目鬘（目の部分だけを覆うマスク）を付けて羽目を外し気味の酔漢など、楽しげな花見のざわめきも聞こえるようである。「食」生活も、名物の「松の寿司」や豊島屋の白酒を賞味し、王子や目黒で宴席（図9・18）など楽しげである。一方、西洋式銃器への関心はますます増し、個人的にピストルやミニケール銃などを購入し、藩としても西洋式銃を導入することを主張する。市中取締に関わる小事件も起こっているが、全般に生々しい政治的緊張感はあまり感じられない。

凡例

一、文字は原則として常用漢字を用いたが、人名・地名などの固有名詞は原文のままとした。変体仮名は原則として常用の平仮名としたが、そのままとしたものもある。格助詞の「え」は「へ」に改めた。
一、明らかな誤字・脱字は右傍に（　）で正しい字を示し、推定できるものは（ヵ）とした。字順転倒や意味不明の場合は右傍に（ママ）を付した。
一、原文中の朱筆は「」で示し、（朱書）とした。また原文の虫損・破損・判読不能の箇所は字数を推定し、□または［　］等で示した。
一、原文中の抹消文字は基本的に掲載せず、訂正文字のみ掲載した。
一、平出・台頭は二字あけ、欠字は一字あけとした。
一、挿絵はできるだけ元の位置になるように収めた。彩色された挿絵はカラー図版で別掲し、該当箇所に（図○入る）と示した。カラー図版は組版の関係で順序が前後している。

書誌情報（法量単位㎜）

「二二」245×168　竪帳　墨付九丁
「二三」245×167　竪帳　墨付六丁
「二四」247×167　竪帳　墨付五丁
「二五」246×167　竪帳　墨付五丁
「二六」246×168　竪帳　墨付六丁
「二七」246×169　竪帳　墨付十丁
「二八」242×169　竪帳　墨付五丁
「二九」242×169　竪帳　墨付二丁
「三十」242×169　竪帳　墨付六丁
「三一」241×170　竪帳　墨付二丁
「三二」242×169　竪帳　墨付二丁
「三三」240×169　竪帳　墨付五丁
「三四」240×169　竪帳　墨付二丁
「三五」241×170　竪帳　墨付五丁
「三六」240×170　竪帳　墨付二丁
「三七」242×171　竪帳　墨付六丁
「三八」242×170　竪帳　墨付五丁
「三九」247×173　竪帳　墨付四丁

【第二十二冊】
（二十二冊表紙）
「（朱書）「二十二」」

元治二乙丑歳正月十五日より控
（朱書）「正月十九日立御飛脚二月二日着三日達」

正月十一日

昨日兵衛ヨリ明十一日五ツ時御行列以上年頭之御礼被為請并御行列以上御具足餅被下置候旨為知ニ付、例ネン等もいたし候事不相成、明半前起、天気よし、食事済候処三内より誘引、庄右衛門と三人連ニて御殿へ出候得共、御家老衆御小性頭も不詰候得共、御目見申上候人々不残詰、遅しと待居、番人を呼、何時と承候処只今五ツ打候と申、御迎何時参候積哉と糺候処四ツ時と申、トホフモナヒ事ニ付権十郎殿へ一フク呑ニ参リ色々御用やら雑談いたし、四ツ過御殿へ詰、兵衛詰居、御書廿五日立、昨日御飛脚着ニ達、難有奉拝見候、昨夜認置候状ヘチント届候事斗認封し、御小性頭方へ遣候様申付ル、其内押付御戻リ觸ニて大溜りへ出ル、九ツ過也御戻掛御目見前堀治大夫被召出有之由権十郎殿被御申聞候御通服御後ニ付御居間書院横（カ）之御畳縁へ廻り居、兵部殿・兵衛・私・権十郎殿御用番ニ付二ノ間ニ出ル、堀治大夫被召出、数年精勤ニ付是迄之御役料加増問合済、夫より御次之間御畳縁へ列座、御行列以上　御目見申上ル、引、夫より大溜之間おゐて御具足餅被下置、其後御近習出、御神酒被下旨申来リ候故出ル、兵部殿・私・男四郎三人、権十郎殿・兵衛・隼人（戻掛）ハ引込不出、御酒・小豆被下置候所、山口八郎兵衛出、　東照宮御象（像）拝見被仰出候旨申出ルニ付又々前ノ三人拝見ニ御居間出、御酒被下、御礼申上候て引、大酔眼之端ホウ〳〵と甚しく、其内彼是御用出、不参差控抔手間取、八ツ過引、○御具足餅被下候節平均免被下置一同御家老衆御長屋ニ御礼ニ出ル、榊原ニ寄食事いたし、隼人症気起候とて大口説也、其内権蔵・用作抔参り長噺ニ相成、一キン□四分一ノ合口ニ彫為致居候間慰見、七ツ過ニ相成候間帰、今日久振ニて天気上ニて道筋はんこひ突、邪間ニ□（歩）行思侭ニ出来じ、刀鞘二三篇タ、カレ、ホー〳〵ノメニ逢、新橋迄続、いつれもめかし七八歳より四十歳位嫁迄夥々敷事也、奇妙奇代所也、（図1「於大溜ニ御行列以上御具足餅被下之図」・図2「於御居間書院ニ神酒被下図」・図3「於御居間ニ東照宮御象拝見被仰付御酒頂戴御具足初て拝候図」入る）

食事いたし書物いたし居候処、窓下走り何やら物有気也、其内勝手之方ニて半蔵抔出、乱防（妨）抔かや〳〵いたし居（カ）候内豹蔵出、只今外辻御番参り申趣は、今方御中間御番所へ参り、其所ニて大勢乱防いたし居候趣ニ付詰合五人之内三人追掛出候処、伊賀様御屋敷脇ニて刀を抜乱防者有之、段々見候事大勢ニて伊賀守様御家中ニ御座候、迚も私共斗ニて埒明不申ニ付早速御人数出呉候様申聞候趣（ママ）ニ申付、早速出候と返事いたし、非常持今日は三内組故伊兵衛呼、早々自組召連参候様、尤無法之義無之様臨機応変ニ取計候様、後より御家中一組可遣候、段々承候処大勢之趣且伊賀守様屋敷脇ニて家中よし、万一大戦（ママ）合初り候も不知候間、其節之備ニ二番非常持石原源四郎へも模様次第分可被遣候間用意いたし居候様通達可致と達、大勢ヒニて帰、今日私組は御上屋敷へ非常詰ニて、竹内之組宅非常ニて当御屋敷住居故世話役野沢源吉呼、貴様今日宅非常持ニ付申達候、只今云々注進ニ付早々罷越候様、尤中村伊兵衛も組召連参候筈ニ付、万事申合麁忽之振舞無之様、伊賀守様屋敷脇ニて松平家中ニて大勢之由、物見ニ為走候間、弥及大事候ハ、追々御人数可為繰出候間、早々参候様申達し、是又大悦ニて帰、今日休ニて荒賀又右衛門居候故呼、其外相良鋤之助呼、乱防之人数且御人数被遣候ても不足か、又屋敷内より人数繰出し模様ならハ此方よりも多人数可差出候間、其動止見来レと申

達し、小一郎・安吉へ見物ニ参候様云候処大悦ニて駈走ル、其内中村七十郎・牧淞太御逢被下度とて来、関」玄前ニ大勢集騒々敷何事ニ哉、先ツ此方と呼候処両人出、羽織ノ下ニはタシキ掛、鉢巻金ヲ脇ニ付、小袴着、アヘキ〳〵申趣、私組合一同御長屋ニ居候、是非御遣被下度と申、玄関前ニてはマタカ〳〵大声呼立ル、扨貴様達申事尤、我も参度候得共、竹内御組は宅非常持ニ付只今申達候、注進は松平伊賀守様御家中屋敷脇ニて大勢乱防いたし候趣、殊寄屋敷より人数繰出候やも難斗、且如何之事ニて伊賀守様御家中市中を騒し候やとんと実否不知候間、又右衛門・鍋之助只今早々見て来ル(ママ)と申付候間、参次第時宜より貴様達一組可遣候、御物頭源四郎へも殊ニ寄可被遣候間支度いたし居候様申達置候間、貴様は今日大非番之事ニも有之、其上実否不相分内多人数差出、万一敗取候て不覚悟いたし候訳故、注進次第可遣候間一同御門内へ控居候様申達候間、大非番ニて苦々敷とて頭をかき引取候処、玄関前ニては大変た〳〵大声ヲ立テ御門脇へ屯居、其内物見鍋之助息突あへじ駈来、事々落着〳〵、誠ニ張合無事ニて、伊賀守様より八木兼助と申人出、詫候て事済、大勢と申事大ウソニて、唯四人大酒酔ニ御座候、御安堵〳〵と申ニ付、一番寄合組皆々御長屋帰候様鍋之助へ申含ニ付相良は帰ル、少過又右衛門大笑ニて張合無シとて、小一郎・安吉抔も帰、追続伊兵衛・竹内御組世話役中村又蔵先刻御達ニ付早速駈付罷越候所、松平伊賀守様御屋敷脇御同名様御家来四人、昨日頃近所之者と二三日先ニ鬬(闘)論いたし、尓今はかひく存居候処、行逢ニ付四人掛リ壱人ヲタフサ握リ引行候処、物見大勢集リ候ニ付□をのし揚、見物人ヲ払候趣、外ニ何事仕候事ニ無之と申聞、其内壱人敵手逃候由、八木兼助と申侍体人出、市中騒奉懸御苦労入恐候、何卒別ニ子細も無之間聞済呉候様強て申付、いつれ御名前を承度と申候所差出候とて皆々御笑、鳥渡なから大騒いたし、伊兵衛申ハ兼助何卒御性名(姓)承度と申ニ付名札渡来しと申、其内四方ニてヤアーと声ニて皆々何事始らわんと又々騒々敷耳澄候内チヤン〃〃とそら出火と申内、日本橋通りと申觸ニ付出格子開見候得共とんと見へ不申、弥騒々敷ニ付小一郎呼、火之見ニ参相糺来ル(ママ)と申遣候処早速帰、只今日本橋通り出火候得共鎮火いたし趣ニて皆々帰、今日は如何成日ニ哉、六ツ過より五ツ少過迄之間二度騒候、今朝は思も不懸三座ニて御酒被下、鳥渡なからも二度騒キ候間、今壱度騒候事在之らんと認物も手も不付、三内へ一フク呑ニ参候処今之騒之為ニ大勢集居ル、九ツ過迄噺いたし帰、甚暖気、伏し

松平伊賀守家来
安原小太郎
中根右門二郎
八木覚三
坂橋鉄次郎
詫人八木兼助

同十二日

天気よし、又右衛門来ル、南之方ニて雷鳴五六声、段々曇ル、例刻出仕、御用所昨夜騒申述ル、○出懸ニ三内より届、昨夜之松平伊賀守様御家来八木兼助私所へ参り、昨夜色々奉懸苦労、内々ニて御済セ被下有難奉存候、右之御礼ニ罷出候とて口上書添差出候間、是も御用所へ差出、昼頃引取、一円曇、甚敷暖気、綿入二ツニて道大汗相成、袋足(ママ)之為ニ足先ヨリモへ出候心持なり、帰候て食事いたし、毎夜夜詰候てホロケ気味ニ付昼寝いたし、暮頃目を覚し、六ツ過雨音いたし、五ツ過迄認物いたし、伏し

同十三日

晴天、暖気、十兵衛来ル、丸子之隠居粟餅持参、三内・庄右衛門昼前帰、甚敷暖気綿入壱ツニてよし、三内と浅艸観音堂尓今見候事無之参らんと出かける、暑き事庄内之三月末四月始之様ニ御座候、日照られ頭痛いたし候程也、折々店ニ入候て暑き凌よふ也、綿入壱ツニて汗ニ相成、両端

之出店色々美事ニ飾目驚かし、雷門を通り本堂ニ至、とても私之よふなる無筆物之筆ニては紙ニ載候事難敷、堂下地内を廻候ニ付、カリハサシ・手ツマ・ミセ物・コマ廻シ・生人形・ヨウ弓・扇キナケ・食物、誠東都昌栄目を驚し、梅屋敷を廻り、追々開始、両三日ニて盛りニ可相成、フラ〳〵と店〳〵ニ寄暮頃帰、御返事を認度候得共ネムシ草臥し故思案

一、益御機嫌能被遊御座候由恐悦之至ニ奉存候、外一同弥大丈夫ニて暮し居候由大慶不斜候、私儀日々認候事ニ相勤居候間少も御懸念被成下間敷候

一、大時計之儀委細云々被仰下奉畏候、目覚も委曲為申聞候付候て宜敷出来可仕候

一、浪人之儀被仰下、道中は静ニ相成候由、耕雲斎此節如何相成候哉、沙汰も何もなく相成候、長州も相分不申候、松前様先達て京都行道中より引返し引籠候由風聞有之、御家より評決ニ相成、菅秀三郎被遣候処、道中より被引返候て追て沙汰次第上京いたし候様公辺より御沙汰ニて、二日路程参り帰候、御名前忘候得共御老中両人上京被仰付候趣与一（カ）右衛門十一日ニ噺いたし候

一、傅吉へ甘納豆度々不及、其外下物相止候様被仰下奉畏候

一、西洋炮は弁利ニ付江川へ入塾、追々入候積ニて五人程撰候様御家老衆被申聞候得共人撰も六ヶ敷、考居候

一、加奈川竹内遠乗之事ハ竹内馬一番弱候由、頭を揚、今日御入門よふニチヤク〳〵と乗候為、一二里程ニて汗を出し息合ニ掛候由、全馬乗事知不申為也と人々大笑噺ニ相成候

一、田中弥太郎早追ニて下候節御働転（ママ）被遊候由御尤ニ奉存候、御使番斗四人下候、誠珍敷事重畳恐悦と可申候

一、子共両人とも一点之障無之成長仕候由、嘸々世話事ニ可有之、道ニて子共と同年位子共見候へハ思出し居候、文次も嘸々丈夫ニて下候頃は達者ニ相成居可申

一、西洋筒之義被仰下、是迄筒は如何可有之哉と善悪分ヶ兼居候処、去年之合戦ニは管打ニとても向候事不相成、荻野流筒無慙ニ負候由承候て考候へハ弥西洋筒道利こときハとても向候事不相成候間丸子を呼、夫々注文仕、金斗ひつかい居候事也

同十四日

天気、三内と一趣ニ神田橋へ参候所辰巳之方雷鳴、次第〳〵曇、出仕、御用格別無之、明十五日　御戻掛御礼被為請并新徴年頭之御礼被為請候趣御用番被申候、鶴ヶ岡御家中惣名代竹内十太郎十二三日頃着之由、明日之被出召　大御前様当三月十五日後御登被遊候趣、大殿様より被仰出候旨書付ニて被相渡候、引取直ニ権十郎殿へ参り色々相談いたし戻り、玄関へ出候所隼人より一ふく呑ニ寄呉候様小一郎申ニ付寄、雨ニ相成、色々世中之雑談いたし、権十郎殿へ参り、当春交代登之仕法建之事噺いたし候、二三日中又権十郎殿へ不参ハ不相成候と、其分ヶハ嫡子・二三男三百人余二十五人ツヽ組合、隔年とか又一年置とかニ為登候相談いたし、いつれ取調壱人ニテ甚御手張なりと口説候、暮頃迄食事不致帰、六ツ過白井弟二・松井吉蔵・日向庄介・小花剛蔵・神田六右衛門を集、稽古いたし居候人□調、夜八ツ頃迄居帰、即伏し最中調中（下ヒ）ニ地震、フラ〳〵不致尻□□〳〵ト突揚□ラレル、ヶ様地震初ナリト皆々噺いたし

同十五日

雨模様、三内と一趣御殿へ詰、御戻八ツ頃、御礼申上、直御表於書院新

徴百五十余御礼被為請、御目見済、雨強降ル、三内と一趣帰、藤助・道之助・□蔵・又蔵来ル、先刻丸子チ、参持也とてミニヘイール筒置帰候よし申聞ル、其筒持三内へ参り九ツ過迄噺いたし帰

同十六日

雨天、寒し、雨ニ雪交り降、今日ニて両度雪見ル、丸子ノチ、参り昨日鉄筒小道具持参、九両三歩相渡し、中村又造・伊兵衛・七十郎・野沢道之助参り皆々□、伊兵衛今晩参呉候様案内来ル也、客対ニて昼迄手間をツフシ、昼より調ニ掛候処、二日御認之御書相達奉拝見候、颯と一へん見候て又調ニ掛ル、七ツ頃半兵衛来り三内より押付御出被下度申ニ付出掛候処、庄内より為登候品々地走、塩鳥汁・糀漬焼鳥・味噌糟漬鮭・貝柱之玉子とふし、五ツ過迄噺いたし帰、九ツ過迄書物いたし伏し

同十七日

雪は晴候得共甚寒し、屋根之(カ)白ら梅之花も此雪ニて嘸ガヲラリ可申、三内と一趣ニ御殿へ出、今日権十郎殿へ参候積ニ付直ニ引、榊原へ参居候処、権十郎殿より不念書付差出候間、今日之処は御断と申越候、誠ニ無張(合脱カ)、大勢集賑々敷、七ツ前帰、道は雪雨ニて土へ調合いたし候へハコシアンヨリモ甚々敷、ノラ道閉口也、直ニ三内へ寄、暮頃戻り候処半蔵御抱之者祖父年賀之餅ナリとて五合位之餅七ツ差出候間、家来ともへ四ツ分、今晩余りヒへ候ニ付雑煮餅□□、乍去独ニて給候も無張合、御組世話呼、庄右衛門・権蔵・楫右衛門・伊三郎・六兵衛・金弥集、色々鉄砲之評儀始り、伊兵衛呼、五ツ過ニも相成候間権蔵ハ鰹剥り、金弥ハ塩梅師、伊兵衛は餅焼、賑々敷九ツ過迄居リ帰、伏し

同十八日

春之助と申音夢中ニて聞、目は不覚、床中ニて色々弁じ漸々目覚し、春之助此頃中調候帳面ヲ見居なからコレ〳〵悪敷事アライフトキ〳〵と申ニ付、篤と見候処帳面之上ニシラミモヤラ〳〵とウコキ居、是ハ大変と春之助生捕、出腰より左衛門河岸へ逃し、春之助帰り床より出候処五ツ廻り、晴天寒気難堪、水之氷此迄無之、髪ゆひ居候処又右衛門来ル、其内丸子ち、参り、スシ(ヒカ)トウル一挺・遠鏡此は当時流行形、両眼ニ、外渡り物、琴ノ音シヤミセン□□(色々カ)音出候物也、又右衛門帰、食事いたし、今日は大砲組小林組改大砲組と称シ初　御目見有之、五ツ半時□(戻カ)り、其後御出有之趣故嘸御早く御目見も可有之処、寝過遅刻ニ相成と存支度いたし居候処四ツ廻り来ル、是大変と取物とりあへし走り故道之氷甚々□し、今日は遅刻ニ相成、嘸御目見［　］不念定敷とアヘキ〳〵いそき行、御殿へ出候処只今ハ最中と席を揚居、先ツ安堵いたし、四ツ過　御目見も初り、表書院上段御着座し、御家老初、御組頭・御小性頭・御用人・大［　］二ノ間御畳縁へ列座、御取次より御奏者代り関甚大夫・中村右門、三ノ間ニ出披露、市右衛門二ノ間ニ出問合せ、五人ツ、八十人位出ル、真先ニ中奥御小性中世古仲蔵・北村兵衛中奥かり大肴台持出、鰯如山漬ニ持出、御三ノ間居へ置、夫より前書之通五人ツ、出、早速相済、兵衛は引取、権十郎殿より呼ニ来ル、出候処紀太平五郎壱人□□列座なく申渡候様、三尺位之叱書差控伺之通被仰□、十二月十九日大筒組取逃候末」始也、平林甚吾(兵衛)へと申達、森玄□(端カ)詰所出松宮良禎事相談ニ付、申事ハ至極尤也、其訳ハ追て可申上候、尚明後日□(迄カ)挨拶ニ可及之旨返事いたし引取、帰候処明日御飛脚立有之趣、御飛脚参候趣なり、十太郎も明日下り、八ツ過食事いたし、さむく巨燵へ足入候事毎夜之為ネムク相成候間少シ寝候処、金弥・剛蔵参り起サレ候得共只今取込中ニ付後刻参り呉候様返事いたし、又寝候得共不釣合ニて起、暮頃十兵衛・小六・藤助・伊兵衛・春之助・兵介・百之助・弥太郎参り調物いたし、四ツ半頃ニ土鰍汁残鍋からを(カ)取寄給ル、在勤(カ)ニ無之ヶ様事ならぬ事なりと一同大笑候てひへ汁給、九ツ

過帰伏し

同十九日

今日雪空、又右衛門・祐吉・乕七来ル、三内よりふき取餅至来、今日御飛脚立之趣、昼前調物いたし其後書状認、八ツ過御上屋敷へ為持遣候、御機嫌奉伺候、尚奉期幸便時候、以上

正月十九日　　松平造酒助

【第二十二冊終わり】

【第二十三冊】

（朱書）「二十三」

正月十九日　　（朱書）「正月廿五日立之御飛脚二月八日著九日達」

書状認隼人へ頼遣、折々雪、暮頃食事塩鰯ニ豆腐汁、調物ニ掛居候処岡吉来ル、五ツ頃迄書物出来、足延し江戸噺いたし、此頃定府小林周蔵所へ本町より能女か参しと申ニ付大笑いたし、岡吉先生か下候ハヽ早速召使取呉候様祖母さまへ我ネタリ不申ハなり申間敷と申候へハ、フフンと斗申故尚々構申候て鬱気散、最早風輪（風鈴そば）そはか参り四ツ半ニも相成候半と

て帰りぬ、床延させ伏しぬ、色々世中之事考なから小夜着之襟ハキレ、中より綿とかか出て来り、背中はもそ〳〵いたし候様なり、岡吉額余り新徴気候故追付おとさま被登候処余馬鹿気候間ヒタヒ広いたし候様ニと申候処ナヒ〳〵と申て帰、大ナマ男ナリ申候

同廿日　今暁地震

天気よし、朝より認物いたし例刻出仕、御用は格別無之昼後諸役引、我は少認物いたし八ツ頃引、直ニ榊原へ寄割合を食、玉子焼ニ小串・生姜・天王寺蕪出シ、七ツ過より権十郎殿へ隼人と両人参り色々御用相談いたし、吸物出ル、土鰍・酒肴ハ何魚ト可申哉アンカケ一砂鉢・烏賊・青物山葵・三梅漬、壱之砂鉢二種之地走、五ツ半頃迄御備登等之相談いたし、其外丸子御扶持被下方三人ニて相談も相済帰、直ニ三内へ寄、九ツ過迄御用弁し、戻り伏し

同廿一日

晴天、権蔵・伊三郎・養蔵・丸子チ、名松斎来ル、皆々帰、昼頃又右衛門・伊三郎・権蔵・楫右衛門参候間、小笠原鉄炮矢場へ三内稽古日ニ付一趣ニ参候、此頃ヤケール筒・ミニケール筒・ヒシトール三挺打試、ヤケール中り極上、後二挺中り悪敷故、幸丸子参候間為直遣シ、半兵衛・伊兵衛・弥五郎・林蔵・定之進・又右衛門・庄三郎・壮介と一趣帰、大橋脇ニて別れ暮前帰りぬ、夜食後認物いたし、五ツ過伏し

同廿二日

天気よし、吉蔵を呼フリキ細工注文、ヶ様〳〵故その通□脇（カ）方頼呉候様申付、今晩男四郎より隼人・私・三内と案内貰居候間土産物如何いたし候て可然と出仕掛ニ三内へ寄候処菓子箱可然と相談して例刻神田橋へ出ル、次第〳〵曇、御用は無之造酒助独気を詰タル図、昼頃諸役所引、直又隼人長屋へ参る、五島之名産鰯之地走なり、源五兵衛来り為見馬廿四

日頃参候趣申、甚雨模様ニ相成、常木も帰ル、其内医者来ル、色々噺いたし帰、巨燵を掛、横相成居候処三内来ル、其男四郎方より押付御出被下度と申来ル、支度いたし一趣ニ参ル、求候とて色々為見ラル、掛重箱大小、物好も感心ニなるものナリと被存候、茶菓子出し膳出ル、平庄内塩鱈、汁腐豆（ナット）、庄内、ナメ豆腐也、猪口筋子、長皿マクロノ、茶椀之玉子とふし、大食いたし、男四郎余り食候故大さし身歓ナリ、茶、又々宝物ナリとて脇さし出し、色々世中之義噂いたして万謝して帰りぬ、雨天、道連三内故気も不詰、長道を不思不知柳原帰候、明日之御酒・御吸物余程御地走ニて鶴御吸物、然れとも雨降ニは閉口〳〵と考なから在勤之ツラサハ其処〳〵高イヒキ、左右を取片付、猪獅子着物、夜昼不レヌカ、コツロット転、伏し

同廿三日

荒天、土屋順吉・中村七十郎・寺内権蔵参ル、中村三内と大体之御地走にては大変と口説々々出仕、今日は内密御用有之、権十郎殿と表書院ニて相談いたし居候処、隼人御用済早々御地走出候処控居候と早速ニ付、御用済詰所へ引候処、権十郎殿造酒助出候様申来候間出候処、兵衛出候様呼次ニ付兵衛戻、今日之為御祝義銀子三枚被下置候てと申候て、権十郎殿其元様被出候様申ニ付出候処、兵衛向様今日御御祝（行）義目録も被渡候、銀子三枚被下置候、誠不存寄有難仕合奉存候、直ニ御用所へ相廻候処、一同御用所之口へ待居、権十郎殿と私之長談、皆々御吸物サメ候と

て大口説故大笑ニて申訳いたし、夫より御用所へ列座、御家老・御組頭・御小性頭・御郡代・御用人・御留守居頭取、鶴御吸物、今日ニて登候後三度被下、此度のハ余り結構ニは不戴、長皿三ツ、御地走ハ客之五六人呼候ても不足は無之、タツフリ（タップリ）いたし候て、前居ラレ候節皆戴事出来間敷と存候程也、権・造・男は酒は不被下、御地走斗給候て飯給度相成候得共三人とも弁当も不食、皆々大酒盛り、盃は申ニ不及、長皿御吸椀大酔、興有之、飯食閉口、其内男四、八郎兵衛へ上之御膳被為済候て頂戴御願と申候処、八郎兵衛建行申上候と申□□内御坊主三人ニて居来（シヘ）ル、一膳は兵部殿之程居へ、今一膳は三人之□居へ、外一尺位之鯛御焼物居へ候間大笑いたし、大間敷御地走来ルと申御膳［　］と間敷［　］之飯被下度と申事成と申候処、御鉢は只今最中被取［　］少［　］成と八郎兵衛申ニ付と候ニ付待遠ニ待居、先ツ私□之前居置、御ネタリ申上候て間敷候御地走三人ニて分ル、御箸之付候御焼物権十郎殿と半分訳、権十郎殿御坪取魚身砂糖味噌掛候分、私取候分ハ御煮物ニて ○鯛之切肉 ○松茸 ○モウソウ竹ノ子 ○カキ蕨ノ形カマホ□ ○青物五品、男四郎分ハ御汁豆腐ニ魚分候、権十郎殿皆食尽可申と食候、御膳へ付長皿不残食尽、其内御

済被遊候とて御鉢来ル、御吸物椀ニて軽三杯食候処、上御壱人前被召上候御残故尽候故御代り又々御台所へ申遣候処、御用意無之不参、御鉢之飯ハ被召上故真白ニて面々共の給居候飯とは別段なる成ニ御座候、口代り来候処察之通アシク不被給、御台所タキ候て遣候趣ホヤ〳〵いたし、飯へさし身掛不残頂戴尽、腹ハ太鼓之ごとし、男四郎若キ衆別段大鉢残、権殿・私斗ケコ（下戸）故給尽、御次香物取寄大根漬カラ口給居、皆々大酔、大体ニいたし、近（カ）候て銀子被下御礼御用番へ出候処道ニて酒酔秀三郎・元右衛門・隼人・男四郎・東十郎・繁蔵ニシメラレ、岡田五十馬ノカか御酌ニて呑ニ参候処ニ是非引カレ無拠参候処、先ニ兵部殿初として主馬・多門・御留守居中役二三人ニて御吸物出し、五十馬嫁御酌取最中所へ参り、又々賑々大興と相成、不呑酒三杯位被為呑、漸透見合東十郎と一趣逃候て榊原長屋参候処、十兵衛と権蔵居候処茶出し貰、五六ハイ続呑いたし、今日は荒天大風雨也、少休口説々々戻、羅紗之合羽も通候程也、暮頃帰候て銀子被下御地走抔半蔵と噺いたし、軍調ニて三内へ参り、九ツ頃帰伏し

同廿四日

晴天、風有之騒々敷天気なり、岡吉参候て鍔一枚求、刀之拵も藤助へ頼候処、承知いたし候趣、兼て色々ネタリ参候間夫々挨拶いたし遣候、小六来、三内・源四郎来り、最早出仕刻限ニ相成候間返し出ル、冨士南風向風眼之開キ候事不出来、塵埃霧之ことし、風之強ニ哉、凪いつれ尾付音もいたし、御用之格別無之昼後諸役所引ケル、退出、風益強し、御長屋へ帰食事いたし、今日は昼寝いたし度日なれとも丸子亥太郎晩刻迄参度と申遣、調書存寄添出候積之処、是も清書も不出来、其内明日之便ニ菓子二箱遣候事ニ半蔵申付置候処持参、甘納戸（納豆）ハ傅吉、今一ツ北村当時□□之福ハ内、又は何デル申名色々有之分ハ甘物被給候ふとき御子達へ

□□（進上カ）此方之第一御菓子いつれも宜敷風味御座候、御料理は地」下能斗魚等又［　］子等不［　］面白者ダラケよふニ御座候得共、是ハ是非度と思［　］品無之［　］入［　］能品は無之者ニ御座候、廿四日晴天ニテ真白冨士山□□橋ヨリ為［　］也、昼寝いたし候処権十郎殿手紙大口説ニ［　］郡代別紙御廻申度可被成御噺ニ有之候得共［　］別紙無之惘果タル大麁（ママ）々なり、無拠御返事書て別紙御召落と存候間、早々御廻被下度申遣候、三十人御家中ミニケール申立候処、御郡代返事不致ニ付権十郎何百石迄三年賦、百石以下ハ七年賦と付候て御郡代被渡候処、夫へ又附札いたし別紙ならん、久振ニて目を休候処イマ〳〵敷事と独大口説候（図4入る）其内丸子亥太郎来ル、兼て大殿様下候節西洋形之鳥打筒御土産ニ持下り、下屋敷へ被為入候節献仕度候間、形を為見候様申置候故図面ニて持参、考ものチヤと脇ニ置、酒を為出ニ御地走ハ煮豆・イカノカミ・鰯・干味噌と種々丁寧之在合、其後御吸ひ出ル、白魚へ玉子也、又右衛門来り早速帰、夜食後三内来、丸子大酔、権蔵・伊兵衛・丸子帰り、皆々甘物無之哉と申候得共とんと無之、権蔵少斗堅餅有之と申ニ付早速寺内長屋ニ取り遣候処来ル、四人ニて潤沢餅食、三内と私ハ調物之相談いたし居、伊兵衛・権蔵西洋筒之手続一二三と大ハマリ也、風は強し、一二三之音ヤカマ敷、先刻丸子之噺ニ今日は何とか之廿何年ニて若出火ニ相成候ハ、大火ニ可相成と申居候噺之事抔を噺いたし居候処へチヤン〃〃ソラ近と障子明見候処、冨士南川上ニてクラ〳〵〳〵〳〵火出、燃上ル勢大変〳〵早速柳原迄参ニ申と皆々帰、夫より取片付始ル、大世話、其内御組之面々思ひ〳〵装束いたし来ル、御上屋敷非常詰□□来ル、大炮組御門前へ控居候届なり、出始□頃御上屋敷方当リ出［　］出んと仕候処御上屋敷之火は消候由少［　］付□之窓明見候処其火勢シサマシク、画候橋ハ新橋、此先ノ□□橋脇材木炭家二三軒焼失、川向へ

吹掛付候□有之候得共運能消候由、［　　］向ニ付候□□万軒焼候物ニ哉不知、出□河岸ニて大仕合と可申、半時余焼ル、登候後之近火也、火鎮候故伏し

（図5入る）

同廿五日

天気能風は不止、伊兵衛来作夜片［　　］出候て書状認ル

【第二十三冊終わり】

【第二十四冊】

（朱書）「二十四」

正月廿五日　（朱書）「二月五日立御飛脚十四日著同十五日達」

今日御飛脚立候趣ニ付書状呈しぬ、其後笹平九郎来ル、認物ニ取掛り、暮過三内より手紙、川内正五郎改名願之通被仰付、赤飯可仕処候得共麁菓子持参ニ付御出被下度と申来、改名之事先夜三内へ参候節正五郎改名いたし度と申間、私先ニ川内鵜兵衛と改可然と申候処、伊兵衛ハ川内亀（キ）造と可然、三内ハ川内鯉（リ）兵衛と可然と申ニ付、皆々首一なりと申ニ付、即座ニ願書為認鼻紙ニ入、翌日差出被仰付候分ニ付申越候也、伊兵衛来ル、早速帰、其後五ツ半頃三内へ参候処、大勢居、私参候を待候処故早速色々菓子出ル、九ツ半頃帰、其後認物いたし、七ツ過伏し

同廿六日

天気よし、風も止、権蔵来ル、例刻出仕、御用無之彼是いたし候内諸役所引、御用所ニ不出、為見馬参候之趣ニ付直隼人へ参食事いたし、榊原へ男四・織人・元右衛門・八郎兵衛御倹約相談有之集候趣、ヒンホウ（貧乏）相談へ私へ出候様織人進候得共、真平御免と二階ニ上り、置巨燵を為掛、十兵衛廻りニ参候とて留守、為見馬七ツ過ならんと、夜詰候故甚ネムク独静ニて快昼寝いたし、起者有之間目を覚候処乗七也、如何いたし候哉と聞候処、今日折角御出申上候得共差合出、馬今日は参兼候趣断来と申ニ付、幾日参候事哉と申候処、晦日ニ参候趣と申ニ付左様ならハ返らんと榊原家来共へ馬は不参趣ニて帰候間其旨隼人殿へ宜とて帰、伊兵衛来ル、定日御組之寄合ニ付七人来ル、四ツ頃帰候故早速伏し

同廿七日

天気よし、小原萬治来ル、宮之下太夫より養子参候者之由ばゝヨリ聞給居候、此節丸子へ弟子ニ相成居候て三内御長屋ニ居ル、日々通也、昼後認物終日いたし、暮過より書物いたし伏し

同廿八日

天気よし、三内と一趣出仕、引取、三内と一趣金具師道具調ニ本町辺廻り、○金挟ミ○三ツ俣キリ○タカネ○コウ箸○ヤシリ（鑢）二挺○調、ヤシリハ鍛屋より調居候処、二階之上ニてカツ〳〵〳〵金具師音いたし候間何ニいたし処ニやと聞候処、娘子供管（クハン）西洋筒管打、面白からんと土間より上り見候処、十七八才之おむし（御娘）ハ管之端キリ居候間、一日何位切候哉と承候処、千程も切と申、夫より二階へ上り見候処、十才位之おむし唯壱人居管を拵居候、分ヶもなく拵候体奇妙也、娘色々伝達いたし、ヒストール在りましか、御拵ひなされて御覧あそはされ、わけハアリマセンと申故、左様なら明日よりねさんへ通ニて参らん抔、はやうたん抔申て鍛屋出てんといたし候処、かみさんか是ハお有かとふと送り出し候故挨拶いたし出、道々誠ニ面白処を見たり、いつれ我も拵わんと、道具無之、拵候ならし、早々注文可致と道々相談して帰、今日半日日ニ照られ、頭痛いたし候故早々伏し壱寝いたし、チヤン〳〵本所通りと申音ニて目覚し見候処遠方故早速伏し

同廿九日

天気よし、今日兵部殿・隼人と新徴屋敷へ稽古見ニ参候事ニ兼て約し置候処、今日五ツ過より御上屋敷へより参候、隼人へ寄、両人とも馬ニて

参候間、馬牽寄候様ニ申事ニ候得共、我馬は物おひへいたし候て案所して乗候事出来ぬ故御先ニ参らんと出懸、モチノ木坂へ初て聞々参り、東十郎屋敷へ参り、衣(カ)被掛、少間置兵部殿・隼人も参候趣ニ付御殿へ出ル、茶・菓子出し、稽古所都合宜敷趣申聞候処、新徴夫々役人参候て始てて とて、天気能抔代々ルコ(タ脱カ)ヘル、先達有之て稽古場へ廻り候処、新徴組惣じ会釈いたして座着、御役人も左右へ列座、新徴之内役人銘々出候て時候述、是迄見候事無之大稽古場、板敷四方ニ新徴居、百五六十人居候ても狭(セマ)からじ、真先槍術試合二十人程一同つかい、とんと見候事無之、つかい方野試合とも可申、其後二組ツヽつかい鎗終り、長沼(カ)三丁稽古場へ出、百人斗一同仕合、誠夥々敷耳はタコニ相成候様ニて唯鞨音斗蟻之群

しも同様、とんと勝候も負候も不分、其後二組ツヽ仕合面白一見いたし、兵部殿・隼人は馬ニ帰、我ハ歩行ニて暮過帰、食事、九ツ過伏し

一、昼吸物出し、海老・松茸・青物也

一、兵部殿之火鉢ニころひ候者首之少やけニ相成候て

同晦日

天気よし、例刻出仕、持出し御用も有之、明日より諸役所御留守中同様隔日出仕、御用所私共・御小性頭・御郡代等(ともふハ)は御用有之節斗出仕候事ニ相成候、昼引、今日為見馬参候趣ニ付隼人へ参り、曇寒風難堪巨燵(ママ)を掛、両人尻切巨燵ニ入、漸生候心持いたし、七ツ過馬参候趣ニ付馬場へ出ル、馬見所腰掛へ兵部殿・隼人・私、男四郎ハ後より参り、今日御成有之、五ツ時より昼過還御、早速上ニても上野へ御出、御戻遅刻ニ相成候故後より参り外一郎右衛門其外大勢也、馬十三四疋来ル、小金野子も四疋来ル、一郎右衛門注文之由、大抵の馬壱疋有之、其外南部出・三春出能馬壱疋無之、遅刻ニ相成追て見候事ニいたし、黒鹿毛壱疋馬なり、外ハ初より曲馬也、早々帰、道より挑灯付、暮過帰ル、食事不致内追々寄合として人々集、源大夫・十兵衛・平兵衛・藤助・七十郎・順吉・小六・春之助・庄右衛門・六兵衛、色々相談取極等有之、去年頃と違御静謐ニ相成候故、無文字巨細之事のみ有之、町方ニても是迄宿いたし所も不宜候間、不参候様達候哉、此頃も公義人九人迄召捕候抔、馬鹿々々敷噺も有之、酒酔等者は召捕不申様申合セ、九ツ半頃迄居、一同帰り早速伏し

二月朔日

今日朔日之御礼日ニ付出仕之処、此頃取調物之清書仕候積ニて一両日引籠り候間、主馬へ頼申遣、取調御用持居候間出ルニ及申間敷と申候得共、右之事申立ニて出仕不申候ては我侭よふニイハレ候ても不宜ニ付、引込候事多兵衛ニ付申遣候

一、例之麁々者ニ付余程之申立書御役人若是迄之通ならハ役退願被下候趣意書付紛失いたし、去年より尋候得共ミへ不申、反故又々出し、小市・安吉へ為見候最中、丸子松斎鉄炮三挺持参、色々申付置候分也、茶を出し噺いたし居候内昼ニも相成候間松斎へも膳出し御地走塩引ニ豆腐汁、冷飯茶を為掛、色々噺仕候内、大殿様へ西洋形ニいたし鳥打鉄炮一挺献候趣ニて図面等持参、私為拵御土産ニ可差上と存候得共、何分大事物不足故下候迄と申付居候処、拵候て丸子差上候積故、私心組空敷相成候様ニ相成候得共、乍去此頃より権十郎殿・隼人と三人相談いたし、追付五人御扶持被下候事ニ可相成候間、私より差上候より増之事と存居候、八ツ頃帰、持参之三挺注文違所々も有之候間又々為持遣、其後漸認物ニ取掛り、白魚之吸物外、烏賊・牛蒡之煎漬、御飛脚只今着とて届来候故余り遠着待遠存居候間御上屋敷迄書状請取ニ遣、五ツ頃御書来ル、誠ニ珍敷雪不足甚不気味也、地震、昼後より曇、雨降模様也、地震空と可申、御書不残奉拝見、御機嫌能趣一同無事之趣安堵して伏し

同二日

雨模様、今日認物いたし引込、四ツ前十兵衛来ル、昨夜宿元より書状達候処、祖母大病と申越ニて親看病下候事出来候物ニ可有之、只今書役呼、先例為礼候居候趣申聞候、気之毒事也と存居候処、昼頃ニも相成候間芋掛飯を振舞可申と存候処へ看病下被仰付、只今下候間早々十兵衛帰候様申越候ニ付大騒ニて帰候、中間抔遣、金子若入用ニ候ハヽ遣候間無遠慮可申遣と申候て返し、昼後伊兵衛来、折々雪、押付地切鮭達候て焼候て給候得共格別能とも不存候、四ツ過伏し、チヤン〃何方ニ哉不見候

同三日

天気よし、今日も引込朝より認物いたし、昼後酒井右馬之助来ル、帰後又々認物いたし、風次第〳〵ニ強吹、五ツ頃チヤン〃〃吉原之方也と為申とも不見、余程之強風、四ツ過迄認物いたし、火無ナリ甚寒伏し、地震余程強し

あんとん（行燈）既ニたおれん（倒）といたし候へともころはじ（轉）、半蔵走り参候て御目覚ニ御座候哉と申来ル、一向之地震なりと申候処引返し行、少過又々チヤン〳〵と申ニ見候事、深川之方角ニ当り盛燃居候、早々伏し夢中

同四日

寒風強し、氷甚敷、庄右衛門来ル、伊兵衛来ル、四ツ頃御上屋敷へ参り、直ニ権十郎殿へ参り候得共、御殿へ出候とて留守、多門長屋へ参候処、十兵衛・十右衛門居候間噺いたし候内、権十郎殿帰候趣ニ付出懸、認物差出、色々御用達し、十兵衛参候て割籠食候処へ親給候積ニて肴味噌漬為焼出し、寛々噺いたし居候内脇方より赤飯貰候故給、鱈之札有之趣ニ付近々参給候事約速いたし帰候て又々認物は状書、甚ネムク絶兼巨燵一寝いたし目覚し床へ伏し

同五日

天気よし、寒風、例刻、今日立御飛脚差出候御用状認候、明日御小性頭手付惣治と申人へ下着二ツ差下候、為御登ニは及不申、傅吉・文次へ下駄差下候

【第二十四冊終わり】

【第二十五冊】
（朱書）「二十五」

二月五日　（朱書）「二月十九日立御飛脚廿九日著三月朔日達」

次第曇、漸先ツ一調出来、兵衛も無存寄趣ニ付御用状并私用状誂、先ツ得寸閑居候処、男四郎参り、兼て丸子亥太郎差上候ヒストール筒御挨拶ニ縞縮緬二反被下候旨被仰出候ニ付、宜御取斗被下度申ニ付家来へ為持返し、早速引取可申と存候処へ帋七出、明日為見馬参候積、壱疋は先日見候黒鹿毛、外ニ壱疋是も黒鹿四才（毛脱カ）ニて能馬之趣申越候間参候様申ニ付参候事ニ約速いたして帰、亥太郎呼ニ遣、暮過亥太郎候間被下品為致頂戴候、例之通酒出し、塩引に豆腐汁のみ、五ツ過迄噺して帰りぬ、四ツ過伏し

同六日

晴天、萬治呼、亥太郎へ頭取御礼ニ出候様申遣、松斎被下物之為御礼参ル、権蔵・伊兵衛来ル、弥右衛門来ル、帋七修行之為、春下候処御差留折々御世話被下候由御礼ニ上りと申、余り馬乗無之故帋七名人とハ如何上手ニ為致度と権十郎殿・隼人と相談之上□（今カ）暫修行被仰付候事ニいたし、仲ヶ間内六ヶ敷事内々有之、職敵と可申哉困候者ニ御座候、四郎右衛門此方ニ居、締方若者之頭ニ相成居候へハ宜敷所、不入事いたし人独潰候様事ニ仕候、伊三郎来ル

徳川寿千代様御逝去ニて普請三日鳴物七日御停止被　仰出候、昨日也、田安君之由、御六才之由、御家督被遊候御方ハ御三才之由、今日為見馬参候処無矢張事ニ御座候、今日より大隙ニ相成候心持、此後之認御人数御差出候節繰出方役は不「及」申ニ、屯場所分・兵粮・高張等事迄明細定不申ハ安心不仕候、隼人も掛被仰付、不斗下道中之心模様ニて真ニ気能仕合ニ有之へく候、男四郎・織人当御屋敷御普請場見分ニ来ルとて寄候間茶出し、下候事早く分候様いたしと申候へとも、とても被下間敷と申、早速帰、伊三郎・権蔵・周作参候て鉄炮下候分夫々包候哉、油を付ル者も有し、掃除出来仕舞、夫より豆煎いたし候て茶を出し、七ツ過皆々帰、今宵御組寄合ニて昼寝と可申哉、暮寝いたさんといたし候処へ馬田弥吾早馬ニ付て参候て（カ）、只今為見馬参候間入恐候得共早々御出被下度と申ニ付早速支度候ていそき行、馬場へ参候処三疋来ル居（ママ）、男四郎参ル、真先鹿毛南部出七才、二番同黒鹿毛六才、三番月毛、いつれも気入申（不脱カ）ニ付早々帰、六ツ過ニ相成御組参り、四過帰、早速伏し、出火チヤン〳〵御上屋鋪より北東ニ当り大橋通りと申其後比ゝ谷御門辺之通

同七日

晴天次第ニ曇り暮過より雨

同八日

雨天、雪交り、寒気は格別ニ是なし、床之内ニ居候処権蔵・庄右衛門・伊兵衛来ル、御家中十四五人ミニケール筒注文ニ付丸子松斎呼ニ申遣、参候間積書申付ル、六ツ過又右衛門、濱治之事ニ付参ル、明日御機嫌伺申来ル

同九日

天気よし、松斎積書持参、伊兵衛呼来ル、三内と一趣御殿へ詰ル、御飛脚着之趣なられともいつ方へも書状不参申事也、書状颯と認上ル、八ツ頃引取、山本権蔵噺ニ来ル、暮頃より中恵・清水増之助来ル、土鰍汁ニ押切より至来塩引地走也、増之助棹まんちう土産也、五ツ過迄居帰、其後早速伏し

同十日

天気よし、又右衛門来ル、帰、松斎・伊兵衛来ル、帰、昼より玉鋳、伊三郎・又右衛門来ル、驚（警）固番不残引揚申達し、七ツ過帰、左衛門河岸子

供凧揚ニて賑々敷二三十人群居

一、大御前様御発駕御延ニ相成候趣、四月十七日日光御年忌之為之由、此頃薩摩奥方も鹿児嶌より品川之中屋鋪へ蒸気舩ニて着舩之趣、追々当地も賑々敷可相成候、柳原御殿も追々普請取掛り之由、私御長屋立ニ不及候、男四郎御普請掛り故、別て六ヶ敷事も無御座候

同十一日

天気よし、権蔵・伊兵衛・松斎来ル、昼後深川矢場へ伊兵衛と一趣参ル、鉄炮当り不宣、腹合ニ掛ル、帰候処御飛脚着之趣なれとも御状は不参、弓矢多より之書状斗達し、申立書□、御郡代馬鹿〳〵敷附紙世話もやけ、伏し、床中ニて考候へは隼人と相談いたし置候乗七御差留其外色々榊原不間下候為重々世話はやけ申候、夢中

同十二日

晴天、誠ニ珍敷晴渡り、四月頃之模様なり、半蔵等皆々他行、私は昼寝いたし昼飯ニて目を覚し、昼例之通無案内十兵衛のつソット出で来ル、例軍評議御人数調一通り草案出来ル、伊兵衛・乗七来ル、今一両年詰候様被仰付候とて来ル、藤助来ル、馬具師来ルと申候へとも評議最中ニ付控居候申候、暮々皆々帰、三内・権蔵只今帰りしと申朝より両人西廻ニ下候品々調参呉候故、整物は炭取

也

六ツ、フリツキ（プリキ）茶

坪十（壺）・同細工茶盆

五ツ・ひやく（柄杓）十

本・肴駕籠三組、

大ヒン一ツ調来ル、二両余分也、

帰候間馬具師ヲ呼、六ツ過ニ相成候間食事為致候て、当時行流（ママ）之遠乗相用候鼻革一ツ申付ル、色々噺之内ニ柳橋・吉原辺之風ヲ聞、甚興有之、五ツ頃帰、早速伏し

同十三日

天気よし、権蔵・萬治来ル、例刻出仕、昼後引、直ニ非常詰稽古所へ参り七ツ過迄見物いたし、夫より十兵衛へ地走ニ成り参りぬ、鱈其外一種持ニて我はもんしろ、権蔵は雑喉汁、四ツ半頃帰

同十四日　昨日御飛脚着ニて御書達し有難奉拝見候

天気よし、さむし、順吉・小六来ル、織人来りと申ニ付両人共帰、司農たゝ倹約之一条、先ツなま返事いたし巨燵ニアテ返し、半兵衛当御屋敷御普請ニて参居候故御庭初て見物いたし、梅花過かけん、両三年先迄ハ錦毛せん（氈）敷したらん、今引替草藪となり莚ならて敷事ならぬ御庭之掃除斗ニて三四十両余も掛候由、田舎者共故此毛なし山野火付候ハ、面白からん噺いたし内ホウート稽古いたし候御組大勢来り、三内大将して今盛り開居梅枝手折、観喜院（歓喜院）様被為在候ハ、御暇位と乍申折、ウクヒツ（鶯）ハ不居、雀め斗飛めくる、長局お鋤（鋤）様御居間相建積書は千五百両位と申事ニ御座候、源四郎・庄右衛門来ル、暮後書物いたし、伏し

同十五日

天気よし、御目見有之、例刻御上屋敷三内一趣ニ参り、鬱陶敷天気合相成ル、御戻掛御目見申上ル、石井与右衛門御留守居添役、菅秀三郎御用人・岡田五十馬御留守居本役、其外初御目見有之、今日出日ニ無之間御目見後早速引、直十兵衛へ参り、異人行逢候節心得取調廻方一同申達し八ツ過引取、暮頃庄右衛門参候間飯出し、権蔵・三内来ル、小豆煮振舞、遅刻ニ帰

同十六日

曇、又右衛門・兵介・司馬参ル、今日大勢遠乗申合昼より之積、九ツ時乗出しと申、向嶌行故浅草目付通りと申合故九ツ頃より支度、馬は例之御召拝借、三内参候（ママ）申ニ付出懸候処、兵部殿・権十郎・主馬・多門・八郎兵衛抔を始として都合二十八疋、賑々乗切、東橋渡り、向嶌乗切、茶（屋脱カ）ニ至ル、此所は桜餅名物、先年遠乗初ニ阿部様鞭を落し、拾候処之由、今は其美人年寄、コヌケ落候由也、次第雨強相成候間早々帰、大濡無慙至極也、庄内と違自身馬具洗いたし干シ、権蔵参り、蝋燭行燈整来ル、暮後御組寄合ニて来ル、遅刻帰、伏し

同十七日

今日出日ニ付例刻出ル、今朝晴天、次第曇り、六日御認之御書達、有難拝見、昼後引、助吉・多兵衛、御称誉之事ニ来ル、大笑いたし候処当人も笑帰ル、松斎来ル、乕七来ル、暮前順吉・藤助来ル、早速帰ル、遅刻伏し

同十八日

雪、昼前十兵衛来ル、帰候て又後刻参候由、権蔵・庄右衛門来ル、昼前帰、昼後金弥・楫右衛門・伊三郎・権蔵来ル、皆々帰、其後権蔵・伊三郎西廻し整物□ニ来ル、十兵衛も来ル、天気相成、夜食出し、鮒之雀焼・貝汁、五ツ過迄居り帰ル

同十九日

雪、さむし、伊三郎来ル、春之助・元治・淞太来ル、四ツ過出仕、大ホタ雪降ル、今日は酒井・田宮・沢井・田宮・小室・菅辺御覧、御殿へ出、今度御減少ニ付私共之内壱人御差下と申風聞有之、既ニ竹内組ニて十七日朝非常詰ニて鯨波上ヶ候迄沙汰ニ相成候間、存意書別席ニて権十郎殿へ委細申述、書付差出候処、今度十蔵殿より密々被申越候趣、趣意違申聞候趣、御内存之間、得と一覧可致と被申候間、何れ之道ニても相当御所置被下度と申述、其節草案壱通上候、御覧可被下候、昼後稽古所へ廻り御覧、七ツ過済帰ル、暮過丸子亥太郎参ル、酒出し、岡吉今日出勤いたしとて参ル、五ツ半過皆々帰、晴夜寒し、明日立御飛脚への書状認、九ツ頃伏し

同廿日

晴天、寒風強し

【第二十五冊終わり】

【第二十六冊】

（朱書）「二十六」

二月廿日

（朱書）「二月廿五日小原萬治出立三月九日達」

晴天、寒風強し、書状今日立へ出シ、庄右衛門来ル、小六来ル、御用無之様ニ相成、余隙過、他行も日々寒サ且兵衛為ニ六度他行外不相成、六度他行ニても度々御家老衆へ不伺出候事不相成候故、思出し次第遊参不出来、別て御長屋居勝ニ相成候、昼寝いたし、晩刻より夜噺ニ又右衛門・兵介・春之助来ル、遅刻皆々戻

同廿一日

次第ニ曇、甚寒也、手洗水氷、例刻出仕、御用無之昼より引取、雪チラ〳〵降、御用はとんと無之、能工面も無之、早ク下、加茂辺へ鯛汁・金頭汁抔至極宜からんと考居候

同廿二日

曇、雪空、丸子ノ松斎来ル、伊兵衛来ル、今日御覧ニ付昼前出仕、旅河・大渕・石原・阿部之稽古七ツ頃済、権十郎殿用向有之参り帰、織人ニ寄、甘物食、暮々帰、庄右衛門来ル、五半過チヤンチヤンホン、火ハ不見、四ツ過伏し

同廿三日

天気よし、権蔵・伊兵衛・松斎・茂大夫来ル、例刻出仕、昼頃諸役所引直ニ帰、大切味噌最早尽候間、廿五日便ニ遣(カ)さん、北村荒粉一袋取寄フリツキ(ブリキ)ニ面倒をみ、詰候処皆不入、其外箱ニ入、扨味噌は□□(毎々カ)遣被下候得共いつれもあまく、茶之さひ給候、能分ン紙包十程上ニ張付上候分ハ至極口ニ叶分故若々御六ヶ敷無之ハ右之フリツキへ御入為御登被下度、此頃兎角下噺斗出候間土産物之工面いたし処、諸品高直何とも閉口、女達への土産算用いたし候に反物絹類三四両もいたし、（図6入る）ソレヨリ二ツチンカ一(カ)ト一両分極上々綿求方は両ニて四五反も出来可申と人ヨリハ不聞、妙々と早速算用出来申付ル、西廻しの長持ニ詰合ニいたし候間、着次第即取織候て下候迄望次第器量次第縞を織可置候、此造酒助も都之水戸(ママ)の水を呑候処器量も潤沢出候心持いたし、暮過半蔵出、色々土産物調来ル、岡吉来リ、内事兎角案事、此方ニては曾祢あめ女を引入候風聞有之、蝦夷地より帰候後誰三四度ならて不参とも色々沙汰いたし由、彼是咄いたし候内御門番人参り申聞候は、只今浅草萱町より中村屋と申反物店ニ侍体者三人強談いたし、最早抜放候処ニ御座候間早速御手加(カ)さし被下度注進ニ付、岡吉一参ニ駈行体妙也、黒之紋付・白之小倉之袴ニ紺足袋、右之手ニは手丸持、左ノ手ニは刀提、ソラ〳〵〳〵キタ〳〵と飛行、其内御徒目付参りぬ、御足軽目付遣候て宜可有之と申聞候得共夫ニは不及、其内世話役参候間、雨も降不申ニ付慰ニ早々参候様ニと達、三内も参ル、其内三人とも帰候趣又々注進ニ付、此迄ヶ様注進は書付町役印ニて遣候事故已来入念候様ニと申達、皆々張合抜て大笑いたし、相良鋼之助来ル、其内チヤン〳〵〳〵ホン音いたし候得共火は不見、九ッ過伏し

同廿四日

曇、権蔵・又右衛門・庄右衛門・丸子松斎来ル、雨降、今日も御覧ニ付昼より参ル、折々雨、石川・助川・中村御覧相済、七ツ前帰、順吉来、春之助来ル、本所ニて　御獲物真鴫頂戴ニ付返事為書遣、暮過萬治明日出立仕候間、御状被遣候ハ、持参候旨申越候ニ付即遣候、目出度期幸喜候

二月廿四日夜認　　造酒助

皆々様

御機嫌能いつらせられ恐悦□□□さまニ御座候、おんめて度申上

【第二十七冊】
（朱書）「二十七」

二月廿四日　（朱書）「三月九日平林出立同廿五日達」

五過書状認出来、萬治隣長屋住居故頼遣即畏申越

同廿五日

天気よし、春之助・定之進来りぬ、昨日頂戴真鴨御礼、出仕、外三月末よふに暖気、御礼申上、十兵衛へ寄、権蔵・源之進来、弁当開、我相伴いたさんと割籠開、宿地（走脱カ）は豆腐ニ貝之剥身汁、寺内は庄内塩鱈、我分は牛房・干鰯煎漬、十腹して帰、往来ニ折々花染之頭巾冠、疱瘡出し居、段々承候処、旧臘流行死人多く有之由、戴し鳥独ニて給候も如何ニ付親類気いたし人々石源父子・春之助・岡吉致案内、男四郎より只今御殿へ参候間御出可被成と申越候ニ付即参候処、雨戸開、権十郎殿と男四両人来居暫噺、我住居候御長屋へ寄らんとて寄りぬ、菓子遠月堂蒸折ニ茶山本千代壽出饗しぬ、暫噺して帰

大御前様御帰被遊候上ハ時々可被寄思居、暮頃より源四・藤助、桜餅宮笥、春之助・岡吉来りぬ、吸物は貝之剥身ニ豆腐汁、平は頂戴之鳥、久振ニて結構也、五ッ過皆々帰りぬ

同廿六日

晴天、漸春暖ニ相成、綿入一ッ着、道楽ニて例之巨燵ニ入居、川向土手は名所ニて初音藪鶯囁、至極庄内之殺生を思出しぬ、五ッ過俣野市郎右衛門噺来、四ッ過伴弥平・白井岡吉、昼過迄弥平居、源四郎来、終日客対、暮過御組寄合ニて来

一、此方旧臘より疱瘡流行多くいたみ候よし、此節も往来ニ折々見掛、いつれも花染頭巾冠セ居、花染いつし地も同拝（様カ）也、御地は如何可有之哉と考居候

同廿七日

天気よし、又右衛門来、川内鯉兵衛来、例刻出仕、昼引、直非常詰寄稽古見分、十兵衛寄候所御飛脚著、不幸申達候趣悔申述帰、曇、最早雨模様也、御書達居有難奉拝見

同廿八日

鬱陶敷天気、今日月次　公義御法事之為止、春之助参、家督之御礼如何可仕哉と伺出候処なりと申候得共、是迄二三男父兄之御礼庄内論も無之候得共、八十石と内旦那勤先例も不存候間、相糺候上ニ可致挨拶と返事申遣ぬ、長十郎・兵介噺ニ来、昼前帰、昼後権蔵来りし故手伝為致、其訳ハ来月三日平林甚五兵衛出立之趣ニ付何廉御下物と厚意申呉候ニ付蝋燭行燈整置候得幸便（共脱カ）無之ニ付下し兼、幸と存先ッ半分三包ニいたし、後三包ハ幸便ニ可下、皆々夫々包貰候、今日東風騒々敷天気なり、豹蔵来

○総穏寺和尚を斬害仕候人、十日町辺之寺之由承候、弥〳〵の事ニ哉

同廿九日

雨天、荒候為ニ哉誰も不参、昼寝いたし、目を覚し候処半蔵出、只今マキ売ヨリ至来ニ付差上と出シ（マキ売ハ焚木売事也）渇居候故取不敢三杯呑続大酔頭ツク〳〵いたし、兼て高名江都名物豊寫屋白酒と噺聞候間、呑度穿鑿為致候処、当時株売別人入替候趣、乍去白酒矢張売候趣ニ付為求呑候得共、格別と不存、庄内よりハ却て不宜候間、棚へ上置候処、半蔵先達ての今日まき売より貰候分能と申候得共、我呑候ては不宜候、（図7入る）明日増之助下候趣ニ付御答申上ル、男四郎より明朔日御用書之趣為知申遣、鯉兵衛来ル、九ッ頃伏し

三月朔日

天気、春之助御礼之申上聞来りし故有之趣申達、伊兵衛粕（船）来之ミニケー

【第二十六冊終わり】

ル求度候得共金無之ニ付十七両借度と申ニ付かし遣、例刻出仕、御戻掛ニ男四被召五十石御役料御加増、八月迄詰下り、山内寛之助昨日上着、御用は(カ)新徴組頭取被　仰付、書状懐中直ニ受取、昼後引取、俄荒天ニて走り歩行賑々敷、帋七も濡て来ル、暮春之助御礼申上候事忘候とて詫ニ参り、即帰、今宵諸組世話寄合ニて庄右衛門・伊三郎・弥太郎・百之助・春之助・新作来り、九ツ過帰ル、晴夜

同二日

今暁余程風、一円曇(ママ)吹揚晴天、巨燵よし、今日先達てより申合セニて王子川溜へ投網打趣向、兵部殿・権十郎殿・男四郎・三内・伊兵衛・又右衛門・長十郎・半兵衛等也、川溜と申候事ハ王子辺へハンシヤロウ建とて川ヲ切留、新川最中堀割いたし居候て、溜々へ雑喉夥々敷居とて参りぬ、ハンシヤロウとは大砲鋳所也、五ツ時より三内・伊兵衛・又右衛門・兵介御屋鋪出、昌平橋前ヨリ曲り、加賀前通、寒風難堪ニ付酒ヲ不呑ハ投網打甚難義ならんと兵介酒買ニ大店ニ入、五合樽入いたし様ニと申候処、手前ニは樽ハアリマセンと申ニ付、兵介心付、伊兵衛・又右衛門トツト笑、兵介火(カ)イレ能々見候処大味噌店故一同腹ノイタキ程笑過ぬ、其内酒屋大店有之ニ付又々三人ヨリ、我・三内不構先ニ行ぬ、左柳沢大屋敷有之古跡之由御成時々有之し、百万石此屋敷ニてタマシ候処ニや一同笑過、三人追付樽と盃求、肴は薩摩芋・揚物持来ル、道々酒呑油揚食しなから田舎出、店より豆煎ヲコシ等整食歩行、此造酒助抔ハ生て物覚候程ニ相成街道ニて歩行なから食候事ハ野行之節ハ丸飯のみ、是とても村中歩行ニて給事無之、恥候事抔ハ少も無之食、アスカ山ニ登、新川堀遠見して王子村ニ下りぬ、外レ之茶(屋脱カ)ニ長十郎壱人待わひ居候とて居ぬ、夫より支度、長十・兵介両人ニて替ル〳〵打、寒風難堪見物不被答、増て網打フルヒ〳〵五六投ニて雑喉余りさむくカタミ候や不懸、漸四五十取、扇屋本陣定参候処、権十郎殿・源大夫・健八・帋七都合九人座敷ニアカリぬ、酒肴二種出候様にと申付ル、即差出、吸物味噌下地ニイナタ青物颯ト入、マクロノさし身ニ玉子焼と二砂鉢出し、勝負雑喉テリ焼塩焼之事申付ル、寛々気散し、皆々遊ニ出、私と長十郎留守、昼寝いたさんと存候処ニ三人戻り、飯鉢ヲ皆々枕いたし、賑々敷宮仕女ニ口をやとひ、私ハ少寝て余り賑々敷目覚し、お末とんとて笑、宮仕女より名聞候哉、態と呼、茶をツカセテ笑居ル、其内皆々帰、七ツ頃より一同退縁頬ニ出候処、十三人之宮仕女送り出申候事とんと不分、唯かや〳〵〳〵申のみ、又々アスカ山ニ上ル、権十郎殿・源太・健八・帋七ハ馬ニて一参駈申、歩行連斗フラ〳〵と遊覧、アスカ山より道滝山ニ至、白鶴八羽田居、此道クハン山古正雪評定所之由、夫より日クラシ辺遊覧、ウシへ(薄縁)リ敷男女入交り賑々敷、江都ノ躍(踊)初見ル、行々天王寺ニ至五重堂在、真開桜見、上野東叡山遊覧、噺よりハ格別無之候得共乍去とても田舎抔ニては見候事ならぬ桜大樹花盛り、□面白し、夫より帰、暮々ニ相成、半蔵先日丸子松斎参候て上ルとて孟蘇(モウソウ)竹ノ子三本出候故即料理申付、三内をも呼振舞、甘味ハ無之候得共ヤハラカハ妙ニ御座候、此節珍敷御座候、庄内へ箱詰下候由ニ御座候得共、日増ニ相成空々と為居候、平林甚五兵衛暇乞参候間、此方模様御噺いたし呉候様ニと頼遣候、書状認、四ツ過ニ相成候間伏し

(貼紙)
「先年一市町藤吉持参御整置被成候様覚居候、此頃他行之折三尺位之鯨半弓求候間、右図面之品弓矢共入候物可有之存候間、御入用無御座候ハヽ、御飛脚便へ為御登被下度候、外矢之根桜スカシ一根求候、随分古きよふニ御座候、大矢根可有之哉と見候得共、とんと見当り不申

一尺余矢ニ
スケマ作

三月九日　　造酒助

御父上様　　」

（中表紙）
「元治二丑歳　三月二日王子の里へ投網打ニ参」遊之図」
（図8・図9・図10入る）

東叡山難筆紙尽得寸閑篤熟覧画

同三日賀

晴天、朝飯平・焼豆腐・大根、汁・ニシ・芋　豆腐剥身、例刻出仕、先ツ兵部殿先日西洋炮珍敷形参候間隙次第参候様ニと被申越候間罷越候処、誠珍形也、三挺共是迄見候事無之、男四郎も来ル、此筒は兵部殿実家之小笠原圖書頭様より借りられ候趣也、四ツ過御殿へ詰、今日　御頭痛気ニて　御登　城御断、御用御祝義出、廻勤昼前帰ル、今日御常用詰不残一ヶ年詰ニ相成候ニ付三内へ御祝義いたし候様ニと掛候処、暮頃参り、是非とも参候様申ニ付、ヲトケハ本ニ相成参候事ニ返事返し、幸ひ米蔵汐乾ニ参候とて濵（ハマグリ）クト土産ニ付直ニ宮笥とて三内へ遣、暮参候処鱣地走、五ツ過帰り、伏し

同四日

晴天、風強、今日休ニ付二日王子行例ノ絵御慰ニ認、御一笑可被下候、暮頃権蔵来り、綿極上壱両朝比奈長十郎頼置候処遣候故袋拵入詰合候積、今日米蔵又々汐ひニ参候て勝負とてはまくり出し、即吸物いたし権蔵へも振舞、五ツ頃伏し

同五日

曇、権蔵今日水天宮ゑん日ニ付有馬屋敷ニ参候間、御入用無之哉参候得共不入と申遣、例刻出仕、御飛脚着、御書達有難拝見し、非常詰御物頭御減少ニ付平林祐吉壱人被差下十日出立之積、諸書付さし出、昼頃引、余り榊原へ無音勝故寄、隼人も廿四日立、当九日着之趣、八ツ頃関甚兵衛只今着之趣ニて榊原へ参りぬ、半頃ニ帰り、白井弟二参候間暮々迄噺いたし帰、米蔵大又々はまくり拾ひ来りしとて出し、汐の三里モ引候由、半蔵出書状委細承り

同六日

雨天、小六来ル、三内・甚兵衛来ル、文之助書状持参、三内九十九餅少々分ニ持参ル、総穏寺噺大話ニなり、昼頃迄居、両人とも帰ル、伊兵衛来帰、甚兵衛よりハマクリ到来し、障子ノ切レより川向見候処燕初見、此頃渡りしならん、屋形舩引不切往来し、（図11「初音薮」入る）在勤者之目毒、去年源吾登候節此御長屋前川日々屋形舟通候処なり、屋形内見候にツラ不見、首と肩辺ならて不見へ残念なりし申、如何様首辺ならて見へ不申、是も丁度能からんと独考居ル、（図12「徒然余障子切レヨリ燕・屋形舟見独考図」・図13「焼蛤大食図　三月六日夜」入る）

今日雨、徒然余り甘物なし、阿蘭陀拵し菓子参りしと申ニ付上御屋敷へ取遣候処、荷物尓今不着申、暮過膳を出し、蛤吸ニ自身焼蛤桑名物（名脱カ）、又造酒在勤巨燵爐焼蛤是又名物、御組寄合ニて追々出来、面々石六・金安・本十・白弟・小剛・荒又等也、稽古論不絶四ツ頃帰、私絵楽、今宵ナンノヱン日ニ哉往来尓今不絶、子ノ刻過伏し

同七日

雨天、朝客大入、源四・乕七・権蔵・伊三・甚兵衛、昼後寝ル、夜食後半蔵出、書状披露、御一同御機嫌能趣、九ツ頃伏し、蚤被攻、鶏之音いたし迄寝事不成、明々少々夢中

一ツ綿入昼夜着光リ耀一枚物蚤シラミ住シ、夜々蚊飛来、内外より攻、

我何罪哉在

防禦考、外防ニ蚊張(蚊帳)ヲモツテシ、シラミヲ防ニ洗濯セン、湯ツカヒ又ヨカラン、蚤防クハフランケツト敷ハ必手足在テ無キカ如ナラン

庄内ヨリ三虫早出タルハ如何ト考ニ、オツカヾケタシヨリ綿入トキ蚤シラミノ玉子ヲ落置、暖国ニヨリヶ様早ク生セシナラン、蚊生考不付、

三月成暖気、綿入一ニテ暮シ、巨燵道楽不取

同八日

雨天、甚兵衛来ル、昨日より参候事ハ榊原禁錮入庄内御下御沙汰無之として御屋敷支配立腹ニ付、多兵衛を以男四郎へ申遣、榊原より只今着之趣申越候間、中間貸呉候様申越候ニ付四ツ前遣、先達てより見舞も不遣候間もふそふ(孟宗)五本遣、半兵衛来ル、秋松金三郎御加石之御礼なりとて参、暫噺して帰り、天気晴模様ニ相成、甚兵衛・半兵衛只今より隼人殿へ参候間御用候ハヽ参候得共、私は思止いたして不参候間宜敷と頼遣、道中大橋迄安吉遣候処丈夫ニて旅行いたし、御宿之皆様御健ニ御座候と申遣候、暮後認物いたし、三内用事有之来ル、九ツ過伏し

同九日

天気よし、源四郎・平兵衛・三内・祐吉下一条ニて来ル、例刻出仕、昼後引、直ニ隼人へ参、久振ニて是迄此方申立御取扱方益奇妙タ事ニ相成候云々噺、七ツ前帰、暖気ニて綿壱ツニて大汗ニ相成、先□より綿入一ツニ相成、向島之桜も盛りニ可相成候と奉存候、尚目出度奉期幸便候

【第二十七冊終わり】

【第二十八冊】

(朱書)「二十八」

三月九日

天気、大封壱通平林祐吉明十日立ニ付誂、大嶌久弥呼出、新徴組取扱役被仰付、三十石御役料被成下申渡、織人来、茶を出し帰、伊三郎呼御人数こま形為拵手伝言付ル、ヶ様之事随一之人也、多兵衛ニ一時(ママ)裡タンキヲときぬ、伏し

同十日

晴、暖、庄介来ル、帋七廿一日下候とて来りぬ、栗毛御長屋前ニて為乗直ニ廻り、終日□(貸カ)、今日又大乗廻候趣なれとも我は断、丸子松斎来、兼て申付置候鉄扇出来持参、庄右衛門・権蔵・伊三郎、御人数駒形拵ニ来ル、甚兵衛来り只今半兵衛も参、三内と御普請見物御庭ニて一ふく呑ニ廻り可申と申ニ付参り、御庭之草之上足延て色々噺いたし、お鋤様御居間八畳ニ五畳敷二間、其外長局一棟今日コマイカキ、明日より壁塗掛候趣、御台所之井戸上ノカハヨリ水底迄二十八間位有之趣半兵衛申、梅花も過、桜も過木(カ)有之、ヤシヲ紅葉今成(盛)り、御庭ニ鵜・あか腹・目白抔居庄内も今頃嘸鳥刺明張之時節ならんと思出し候様也、御長屋ニ帰、又駒形拵、今日汐引と申ニ付蛤拾ニ米蔵遣候得共、拾兼帰、半蔵他行帰、根岸之焼金画三枚整来ル、甚兵衛来ル、酒を出し鰈ニイナタ煮漬持参、宿地走は鮒雀焼ニ豆腐ニ鉢身(ママ)、伊三郎と両人四頃迄噺帰りぬ、早速伏し

同十一日

暖和、伊三郎手伝来ル、馬具師遠乗建具出来持参、其外太刀帯持、鉄扇紐申付ル、昼より上野・向嶌花見趣向ニ付、供小一・安吉・友蔵三人申付、松宮源大夫参り権十郎殿より不念之義内々申越ニ付明日指出候事ニ源大夫へ挨拶いたし返し、追々御組集りニ付食事いたし、袷を着し出掛、上野・向嶌・木母寺迄参り、七ツ半過帰、大汗、久振ニて湯浴し○今日之荒増画、とても如蟻ニして委筆不被立、庄右衛門・権蔵只今より御上屋寄合(敷脱カ)ニ参候とて寄候間廻り方評儀申含て遣し、三内へ大勢集麦粉焼

始、くるみ出し、清江より伊兵衛ニ遣候とて大笑、おみじより名歌来りしとて又々興在、八ツ過迄居皆々帰、伏し

同十二日

暖和、風有、五ツ前差控書付持セ、多兵衛兵衛へ遣、権十郎被受取候趣申越、今日大休故五ツ過起、食事後八ツ過迄寝、食事後為右衛門へ誂書状認、菓子達し、有難御風味いたし、夜食済早速伏し

同十三日

天気、日々大風、砂飛障子当シ事□（雨カ）霰ことし、今暁七ツ前ニ可有之哉チヤン〳〵本所通り、火消とも勢備（ママ）し走る、何時頃鎮候哉、今日ニ相成火事模様無之、唯花見ニ出懸候人斗

○昨日御飛脚ニて時計相達、即開見候処無事

○昨日又々キ綿注文壱貫目参候間袋入申付、近々西廻しニ下候、小長持不分、宮笥物下候透々ニ入合、都合二貫目ニて二両分、庄内は七百目ニて壱両之よし、此方極上ニて両ニ壱貫目と算用、権蔵詰ル、差控書付と返御礼十兵衛頼、今宵五ツ過伏し

同十四日

天気、日々花見夥々敷、女達ニ為見候ハ、嘸々面白がらん、カランカランチヤラ〳〵と前タクリ揚、燃立斗緋縮緬を出し、襟おとし、天鵞賊（絨）リンと出し、長袖の縞縮緬ヲシトヤカニ着し、遅くなりてハイキマセン抔、カラン〳〵スネ出し、アシタノ歯ノヘル事抔ハ少しも厭ませんよ抔申て行、妙々、旗本家内衆ハ立派なり、黒羽二重之紋付ニ此暑さに白無垢の二三も重行、権蔵・伊三郎詰合ニ来り大働キ也、束六（楫右衛門之事間違）も来ル、昼前帰り、夜食後岡吉来ル、五ツ頃ニ庄右衛門・伊三郎・楫右衛門来ル、只今廻りより帰、直□（ニカ）上候処也、（図14「上野社内花見風画」・図15「□（向）嶋桜花見遊興風画」・図16「乗大入」入る）

新吉原中之丁辺廻候処へ若者大汗ニ相成候て来り申聞候義ハ、只今御侍体御方乱妨候哉、既ニ御刀を御抜被成候処也と申ニ付、皆々参候て段々相糺候処、女郎ともと格子ノ内と外ニてサヘ合いたし、私を女郎ツカミ、此之通ニ御座候と手を出候処見候へは、ツカマレ三ヶ所程より血フツ〳〵出居ル、侍タル者女ニツカマレ血ヲ出サレテ不済故女出セと申候処奔候由、左様ならハ亭主出セと申所ニ御座候と申ニ付、亭主為出候て詫候、当人性名又誰殿家来糺候所……（忘候）社人之由ニて至極詫も申候故遺趣抔有之又々参り彼是いたし候ては悪敷、能々申含連帰り、道より返候趣申聞候ニ付大笑いたし、皆々帰、五ツ半頃伏し

同十五日

曇天気、例刻出仕、月次御礼一役壱人宛申上ル、引取、十兵衛参り、目黒参らんと権蔵と三人連ニて出ル、草履取見へ不申、無拠惣吉斗連、三里も有之候由ニ付早いそき、道を能不知故聞々大廻りいたし八ツ七分頃漸行着、不動堂一覧、夫より早々帰、田畑有之田舎めき至極面白し、足ノ平ニてまめを出し、休なく暮頃漸駈付、セキタ之為ニ可有之、もふそふ二本整、惣吉為持帰、即蛸下地ニて煮漬候様申付候処、下地へ湯一と（柄杓）ひやく入汁ニいたし興覚し、中恵御隠居様上ルとてカシテイラ持参、為食れと申候へとも合点不致大笑いたし、五ツ廻りニて帰ル

同十六日

日和、庄右衛門来り、伊三郎参り、昨日他行いたし、水コホシ無之ニ付御宮笥持来りしと申候て帰、時計師来委細申付ル、七十郎来ル、伊兵衛来ル、乗七為暇乞来ル、昼後状認出来、封し出来ぬ、良平へ持テ参れと申付ル

【第二十八冊終わり】

【第二十九冊】
（朱書）「二十九」

同十六日　（朱書）「三月廿二日御飛脚同廿九日着達」

能天気、昼後明日良平立ニ付書状其外色々頼、昨日之草臥有之、平之まめも痛候故昼寝いたし、雨、五ツ過伏し、甚敷暖気

同十七日

雨天、岡吉・春之助・小六・甚兵衛来、出仕刻限ニ相成候故返し、朝政（飯）済出掛候処余程雨也、持出御用有之、芝より　御戻、馬術御覧此雨ニて相止、引取より御人数御用ニて榊原へ参り、干鰯牛房煎漬、泰雲院日故遠慮いたし御地走無之哉と聞候処、大切之御地走有之とて出しぬ、如何成甘物ニ哉と見候処貯品別品ニ無之、醤油実ちんと残し置大笑いたし、夫ニて両人湯漬給、相済候処へ乗七明日出立仕候ニ付為暇乞参り、幸故醤油実為御登有之様ニと伝言頼、隼人大悦、乗七へ弓矢多へ柳橋辺之伝達いたし候様ニ構候所早々尻退大笑ニて帰、御用弁し七ツ過帰、晴天ニ相成、都ニ格別なる事ハ大雨晴無間セツ駄道奇妙千万也、噺合手も無之爐端ニ寄、今朝甚兵衛持参之干味噌をはしらかし給ル、土鰍汁至極宜口ニ叶し故伊兵衛呼振舞伊兵衛虫歯ニて此節、甚兵衛来ル、一趣ニ三内へ参ル、林蔵・権蔵居大噺、清江より伊兵衛ニ遣したる面白介と申や何とも言へきや皆々大笑、誠ニ浦山敷かゝとの也とて腹よる、先のかゝならハ一段面白も可思き後妻ニて底より心ハ如何と又々大笑して八ツ過帰ル

同十八日

雨天、五ツ過起又寝、昼過目を覚し

同十九日

日々不天気、昼後山本権蔵久振ニて来ル、十兵衛来ル、暮前帰、暮過御組世話集ル

同廿日

日々雨天、伊兵衛西洋之短筒十五両とて来ルとて持参、とても求候事不相成とて返し、才料良平来、明日立候とて来ル、健ニて勤居事を宿参り御噺いたし呉候様頼、書状別段不申遣、尤信州通り参（カ）由也、藤助・岡吉来ル、御組より絵本佐埜報義録かり、四ツ過見候て伏し

同廿一日

雨天、例刻出仕、御用格別無之、今日御殿ニて　大御前様五月十五日御発輿之事ニ申遣候趣、日光之為雇料格別と申ニ御座候、兵部殿　大殿様御献（カ）物付参候由、昼後引直ニ非常詰稽古所へ寄、稽古見分いたし七ツ頃帰ル、中恵来ル、兼て頼置し小倉帯地六筋持参、とんと絹同様と見ヘル、六筋とも整、宮笥之積ニいたし、暮過より大雨、九ツ頃起居候得共、雨次第〳〵ニ強降、伏し何時頃ニ哉、チヤン〳〵チヤン〳〵の音、目覚、雨晴大風、井楼より四ツ谷と触込余程火事也、馬乗クハタ〳〵〳〵駈行、折々雨、一時余焼候半と思わる

同廿二日

天気よし、風強し、明日御組連目黒竹之子汁趣向、去年よりの申合ニて弥明日参候積ニ昨日政府へ申述、聞被置候故世話役呼夫々手配いたし候ニ付世話役参ル、關甚兵衛○半蔵○権蔵・金弥・伊三郎、明日早天ニ参候積いたし、春之助兵庫と改名願書持参、剣術者之大看板不掛済間敷と大笑いたし、マンチラ手細工いたし着し来り故誉ル、御静謐ニて目出度し

〳〵〳〵、四浪静ニて、相成丈よく下り申度心願罷在候、尚十五日より来月晦日迄御飛脚御誂物持参不仕と断ニ付其後色々下度と存居候

【第二十九冊終わり】

【第三十冊】

（朱書）「卅」

三月廿二日　（朱書）「四月七日道澤出立同廿日著同日夜達」

今日御飛脚立ニ書状颯と認呈上し、風ニ相成天気弥能、暮頃伊三郎来ル、早速帰、四ツ過ニ伏し

同廿三日

日本晴、先番ニ甚兵衛・権蔵・金弥・伊三郎・多兵衛・半蔵目黒ニ参ルとて七ツ頃より起とちみち〳〵とて寝られじ、明過漸参候由少寝、目を覚し支度、追々御組衆集、引込は庄右衛門風邪、源大夫腹合、定之進腹よふ類を出し、三人病気其外不残集しニ付五ツ頃御門を出ぬ、出懸向風ニてさむし、追々暑気、綿入一ニて大汗ニ相成、浅布（麻布）町ニ参候処午鶴六羽北をさして飛行、四ツ頃目黒はしはやニ至、先番之人々出迎、宮仕女七八人よふ入ラした〳〵と出迎ひ、其内壱人刀を袖ニて取らん出れとも田舎侍ヨシとて直ニ奥之座敷ニ通り、刀を床間ニ揚、（図17入る）皆々続て参り、先番之衆一時斗待しと申、御肴も有之、夫々申付候と申、早天より労したるを謝し、ネーサン馬之小便色之茶出し、舌切雀を尋ニ来リしニも無之故脇置、渇候故水を取寄呑、足を延して休足、皆々不動明王ニ詣（ママ）しるとて出掛ぬ、勝手都合よしと申ニ付皆々呼ニ遣、宮仕女大年寄四十五位ばゝ折々出、皆々恇（カ）れたと大笑、皆々心汲取おかしさ底腹痛し、十二畳十畳へ二十四人輪を掛居わりぬ、大椀にもふそふ山盛り味噌煮いたし出し、続て盃徳利出し、銘々へ酌をいたし、肴は鰈之さし身二砂鉢・煮付肴二砂鉢・鰈の煮付壱砂鉢組合せ、青物生姜よふの物有之、皆々大酔、段々芸を出し、何ニけん（拳）と可申哉始り、御頭は酒も不呑、けんの勝負も不分、忙然として肝をつふして居、（図18入る）八ツ過迄為呑、いつれ大酔と相成候故、いさ帰らんと袴着、羽織を着さんと思候処へ女駈来り、羽織為被着られ早足ニ店ニ出ぬ、女とも出、有難とふ〳〵〳〵と出ル、田道より出ル、続て皆々来ル、金子大酔、はんたニ乗して返し、駕籠より落チンとし、後棒之者（籠昇）背中を両手ニて〆走り行、妙也、一同大笑いたし、柴濱（芝）ニて暫息ひ、暑気難堪し、行々大通ニて水乞ひ、漸々七ツ半過帰、足の平ニ大豆を出し、大クナレニて帰、御組衆一同礼（レイ）ニ来ル、庄右衛門へ竹ノ子二本宮笥いたし○当所遊所いつれ之茶屋宮仕女出掛酒盛り、若衆ニは大毒、一年ハ無拠、夫より長クハ為ニ相成間敷、不呑者も酌取之能為ニ哉十二分ニ呑過候模様也○茶屋席風画此造酒助初登唯肝を消○其内口開肴為食候女ハ此内随一也、衆人皆寄為呑為食居候内外女起拍（立チ）子ニ背中辺イタクいたし候哉畜生（チクショ）めと大声ニて仲ヶ間女をおとし体ヒツクリいたし又々肝（ヒ）をツフシ、一体風俗奇妙也、大草臥ニて伏し

同廿四日

天気よし、風立、権蔵・源四郎来り、今日竹内ハ王子行趣向ニて、甚兵衛三内被誘候得共、三内は病気と号して不参、甚兵衛は参候由、半兵衛来ル、三内皆々参り、直ニ御庭御普請拝見廻ル、風追々強、砂飛御長屋内サリ〳〵いたし、歩行ニ甚心持悪敷、板戸建、透ニ目張為致候得共埃妨（防）不成、今日抔出火ニては大変なり思ひ、六ツ過伏し、戸障子クハタミツ〳〵いたし不被寝、其内チヤンチヤ〳〵〳〵〳〵、本所通騒々敷事甚敷、其火消し勢を揃押行、火元見馬タコ〳〵〳〵、笹元リ□し駈行、遠方、寝、五ッ過鎮火、端より出候半、無左も大火ニ相成可申大仕合也、今日清光寺より竹ノ子至来

同廿五日

曇り、埃飛向不見、例刻出仕、御用無之昼頃引、少々雨八頃より大風雨、不残板戸建ル、透より雨入畳はく、御塀抔クハリミリ〳〵と痛飛落ル、往来人無慙也、（図19入る）七ツ過より追々晴、三内・甚兵衛話ニ来ル、八ツ頃迄話いたし帰ル、今夜之話　大樹公近々御上洛と申沙汰専ら、薩摩大裏守護御免、長州と又々一味ニ相成候風聞、一橋近々下り、今廿五日駒場　御成候て小大炮之調練朝より大雷同様、折悪敷時之調練也抔噺いたし帰今日風ニて土手辺之出小屋潰れ、さし傘折られ候者数百人ならん、将軍家之調練は荒ものに哉、一同難義いたし候半

同廿六日

晴天、甚兵衛来ル、甚大夫昨日着とて御書達、有難拝見、岡吉来即帰ル、チヤン〃京橋通り、早速鎮火、御組衆寄合日ニて来ル、四ツ過帰伏し

同廿七日

晴天、栗毛乗三内へ寄、十兵衛・甚兵衛・正五郎来ル、昼頃御長屋へ帰、十兵衛一趣来ル、昼頃ニ相成候ニ付麁飯出し、ハカメ（和布）ノ酢味噌ニ豆腐汁、昼後権蔵来ル、俄ニ御地走趣向始り、権蔵・三内父子へ振舞宿いたしとて、宿之地走は汁なし、山椒味噌之田楽ニ樽鳥賊と孟そふの煮付也、権蔵地走ハ東都名物松の寿司一折、鰆（サハラ）小串・青物・筆生姜一鉢、三内暮頃より来ル、同寿司一皿宮笥、其後伊兵衛名高茶持参、春之助噺来り、幸地走之処ニて一盃被為呑、五ツ過ニ十兵衛帰ル親之脇へ折候故精進ニ付閉口いたし居候久振ニて地走に相成大悦ひ皆々四ツ過帰ル

同廿八日

天気よし、権蔵・伊兵衛来ル、五ツ過出仕、馬術　御覧、御次を通り御馬見物ニて出席し、大夫達大勢ニて別て興有之、内々鹿毛百度大乗ソクネ、八ツ過相済、即引取、風強砂飛眼を折々閉、漸々帰、今宵三内案内毎夜夜詰候故昼寝いたさんと足を延候処へ岡吉来ル、其内只今より御出可被下と申来し故出懸ぬ、甚兵衛・権蔵膳を持来居ル、御吸物建次郎勝負之塩鳥ニ皿何ト可申哉二尾、肴孟蘇味噌煮、チヤン〃〃〃小石川通り、食事済、定之進噺ニ来ル、髪いひよふ悪敷とて甚兵衛いひ直し、又々チヤン〃〃〃浅草通り、風強けれとも南風大丈夫也、四ツ迄噺皆々帰、即伏し

同廿九日

雨天、春之助来ル、兵吾と名相改書付持参し、時計師兼て申付置候時計出来持参、即掛セ試至極よし、葉新規（車脱カ）ニ直し極長日掛候ても七ツニて六ツ打候事抔受合、目覚し出仕日ニ付四ツへ為打候処是又至極上々、私下候節か、良平　御前様御供ニて登り即下候趣、先達て下候前日参り申聞候間、其節委細不痛様ニ頼下候方と存居候、先より三寸ニ掛出仕、御家中二三男抱人無之大勢之内難義自分飯を焚居候者有之、御中間も三十日後貸付不成と申事ニて色々申立候得共不埒明、私も此節難義色々将（カ）長衆と相談、兵部殿・権十郎殿示談いたし、昼頃一同引取、五月雨終日不晴、兎角降勝之よふニ御座候、晴候日は風吹砂を飛セ、家之内塵ニてサリ〳〵いたし、庄内抔違、都は別段之ものニ御座候、此節桜花過、藤之花最早盛り也、御庭之藤棚盛之折ハ弁当携へ保散せんと三内・半兵衛・甚兵衛と申合セ置、御普請も追々出来、御入目千五六百ニ相成候、惣出来上り迄ハ二千位ニ可相成候、五ツ過伏し

四月朔日

雨晴、鬱陶敷天気、兵吾来ル、御目見有之例刻出仕、榊原へ寄り御戻り頃御殿へ出、御目見済より又々榊原へ寄り食事いたし、直ニ百度・三内・仲蔵と小笠原矢場ニ参ル、毎度地走ニ相成間餅五十疋分土産、七ツ過帰、食事後廻りへ出ル、半蔵召連候、千住・小塚（原脱カ）・吉原女郎張居、吉原中之町之桜植置候得共花過無張合、八ツ半頃帰ル

同二日

晴天、源四郎・藤助・七十郎呼出夫々達事いたし、即皆々帰ル、昼後金

弥来ル、三内へ甚兵衛・六右衛門・半兵衛参居候ニ付用事有之参ル、七ツ過帰、春之助来ル、権蔵・伊三郎勝負也とてタナ子一皿遣シ、御組三四人指網掛ニ参り、勝負雑喉持参之趣向故遅しと待居候処、右雑喉遣、大不勝負之為誰も不参ニ付両人□も先刻より食事不致待居候間参候様申遣候処、不勝負ニて断也、タナコノ田楽いたし食し、昨日大工とも着ニて使所々へ参候由、御飛脚余り遠着也、五ツ頃伏し

同三日

曇、五ツ過目を覚し、伊兵衛・又右衛門来ル、話ハ近々御上洛有之沙汰頻申、如何可有之哉、長州鎮静ニ不相成義て（ニ脱カ）之事ニ可有之、昨日権十郎殿御家（ママ）中より呼出参候て別て沙汰弥増候、三内来ル、御進発之事を聞、甚被案事ニ付参りしと申、万一御供被為蒙　仰候節ハ如何可致哉、第一之義御同勢ニ餓死不為致所也去年若御上京有之候ハ、定て餓死いたし候者可有之と毎度会合之折噺いたし居候、大不調ニ付為之義ニ御座候、此一条甚懸念ニ御座候、戦之事抔思も不寄、馬具師来此度弥御誅伐御進発被為在候ハ、庄内如何可相成哉、甚困た事也　馬具師来ル、色々噺帰ル、牧淞太来り只今松永町ニて御医師之若党松前伊豆守様中間御勘定奉行・・・中間ヲ手切ニいたし候処ニ行掛り、委細相糺候得共不分、若党供先ニて慮外致され候模様、深疵よふニ見受候、番屋ニ三人とも揚り居候故一通り之糺一札如此とて差出、今宵寄合ニて松宮源大夫・興津儀右衛門・中根伊三郎・石原藤助・土屋順吉・長沢兵吾・西堀新作・牧淞太来り、四ツ過帰、伏し

同四日

今暁七ツ前ニも可有之哉、小用起候処西之方ニホン明リク相成候故月ニも可有之哉と存候処、ボンゝと板木之音いたし、床入寝ル、出格子出余り賑々敷目を覚し処先刻より火事也、小用又参り直ニ伏し、夜明、神田明神鳥井脇より出火ニて川端迄焼抜ケ候由、何百軒位焼失いたし候哉、明後弥吾参り候間栗毛乗火元ニ参り即帰、物は不見申候、此後夜中之勤又々乗呉候様頼遣候、今日は鬱陶敷天気、四ツ頃より雨、伊三郎・六兵衛来ル、甚ネムク相成候間寝、蠅邪（ハヘ）間（魔）ニ相成顔ニ集仕方なし、庄内此節居か忘候得共秋ニ不相成ハ居らぬよふニも覚居候、都は別段（ママ）ならもの也、○此頃惣吉ヨト豆自（ママ）曼顔ニて汁ニいたし出し、一向心不付小角豆と見候故一口一本給候処風味はいつ方も不替、早々椀を取り脇ニ置候○此方之鰈至極甘御座候、もふそふ竹ノ子ハ庄内より味不宜、唯ヤハラカ也

○伊兵衛噺ニ来ル

廿日達御飛脚只今着とて書状持参、七ツ過早速開有難奉拝見候、午兵衛様子誠動転語言（ママ）絶候、此頃春之助来り可相成ハ四五月頃ニ下り度、其訳ハ兄より御とさま兎角御弱被居候故とふか不相成候哉と申越候と噺いたし間、叔父様例之御口説有之へく、下候事尓今交代有無之義も不分候間下候事不相成、御とさま弱候とて子を□つ被居候、案事候事抔可有之間敷と色々雑話いたし帰候、嘸々愁傷いたし居らんと思へハ見舞遣候も気之毒、歎ニ沈おらん、一日遠慮書付て明日出候事にいたし休ぬ

同五日

晴天、遠慮書状さし休息（出脱カ）今日出日也春之助来ル、何とも気之毒千万也、三内・伊三郎為見舞来ル、兎角御進発噺閏五月なりと申、権十郎殿昨日も御老中へ出し候由、御上屋敷之噺ハ君御幼年ニ付権十郎殿為御名代御人数引連御供と申事ニ御座候、風説も色々申、権蔵・右馬之助為見舞来ル、追々人々ニ被掛仕候、仲恵呼来り、去年頃より為ニ候哉右ノ足クロ（踝）節余り皮厚く相成候間ハキ〳〵いたし候処、赤肌出候処をとかめ居、根子出熱気も少々有之候ニ付呼為見候処、熱気無之と申候得共気分悪敷有居候、権十郎殿より只今より出勤之儀被仰達候得共何分足之為御上屋敷へ御請出兼、紀太平五郎頼御請いたし遣候、為御登ニ相成候干小鰈五十枚、獺之皮無滞相達候、岡吉来ル、五ツ過迄噺いたし帰候

同六日

明過少々雨、晴天気相成、干小鰈配らせる、又右衛門来り明日道沢出立いたし間御状為持可申間無御遠慮、荷物は一節(カ)持候事不相成候間、五月ニ相成候て下候積ニ御座候日光御祭之為ニ先月十五日ヨリ当月晦日迄継立人馬つかい候事一切不相成候事公辺より御達ニ相成候、加藤甚大夫不知登り、宇津宮ヨリ五六物倍ヒニ被取大弱いたし候由、七ソウ倍トモ申候、今日井伊侯為　御名代日光へ参候由、高運斎(耕雲斎)徒ネラヒ候抔雑節(ヒ)も御座候源吾兵衛より為見舞棹まん中一箱至来、源四郎来ル

【第三十冊終わり】

【第三十一冊】
(朱書)「冊一」

四月七日　　四月十一日立御飛脚同廿日着達

天気よし、書状重田道澤へ誂ニ又右衛門迄遣しぬらんと糺候へは、今朝遣し候と申聞、壱人僕のみ連、荷物とんと不持と申、嘸大封ニて迷惑からん、御飛脚余り遠着、此方よりも不立、内外御用はなきしにやあらん、伊兵衛む津花一箱持見舞ニ来ル、相良鋤之助・北楯定之助太鼓持参散兵之手続稽古いたし賑々敷、昼過帰、其後食事いたし、鎌倉海老之地走也、昼後隼人為見舞来ル、暫噺いたし、御普請物見ニ御庭ニ参ル、半兵衛・源五兵衛来ル、此節御庭松を摘、又は草木摘、段々奇麗ニ相成、　大御前様御庭掃除十三四両請負、お鋤様御庭は八両之由、鋤様庭前之藤棚ハ今盛り開、誠美事也、庄内藤と違葉は一向無之花総のみ三尺余も有之、其脇ニ薄縁を敷、多葉粉を呑、茶呑、保養して暇乞して分ル、夫より御物見ニ参り六尺階子を上り市中見おろし、隼人・半兵衛・源五兵衛・平右衛門丁之方行、夫より下り御長屋ニ帰、五ツ過休

同八日

雨天、冬と違余り天気之続不申候処也、三内より不快見舞申遣、一昨日大下し掛候処全快、大丈夫ニ相成、熱も皆散々ニ相成と挨拶いたし遣、はひ(蠅)夥々敷居、顔ニも飛来り甚邪間ニ相成、庄内辺と余りニ違候もの也

（図20「造酒助怒テハイヲ誅伐之図」入る）雨晴、大炮音如雷、食事後三内より雑喉汁一鍋之内送遣、毎度厚礼を謝し、移りハなしと申遣、又々雨ニ相成、余徒然ニ付庄右衛門へ鬼古し語候者二三人誘引参候様申遣、少過玄関へニヤ〳〵大勢参し音いたし、鬼古し語候者十人余り上候と申聞、御通被成と申候処庄右衛門・楫右衛門・六兵衛・久蔵・兵介・司馬・六右衛門・又右衛門・直矢、荒粉菓子一貸(ママ)宮笥也、宿地走ハ饅頭十一ニ雑喉汁、小蓋物ニて一ツ、小匏瓜ニて酒一ツならてなし、不残出し饗応し大笑、まんちやう一ツ、分候処一ツ残、酒一盃宛呑候処跡一盃残ル、雑魚汁は小茶椀ニて一はひ宛、一同大機嫌ニて四ッ過帰ル

同九日

雨晴、鬱陶敷天気、庄助・権蔵・三内来ル、少噺いたし帰、ハイ無際限面ニかゝり候間又々誅伐、何程殺候ても早速集ル、兵部殿明日日光行之由、暮過より三内へ獺之皮持参し、幸鋤之助居候故委細頼候処ニヲヒモ□(長カ)毛を取り上ルと申事ニ御座候、五ツ過ニ可有之哉泉橋新橋挑灯持行往来遠眼鏡ニて見、大ニ興有、四ツ頃帰休

同十日

天気よし、久蔵来り申聞候ハ十二日ニ鎌倉より江ノ嶌一見日帰ニ参度内意申聞候、里数は十八九里之処之由、此頃足ためしに横濱辺参り候と申候、御家中随一ノ早足故至極可然、いつれ御家老衆へも一通内意之上ニ否返事可致と挨拶いたし、丸子親子松斉来ル、廿八日立御飛脚着、御書達有難奉拝見候、庄右衛門来ル、時計師来りて目覚掛ル、トマリ候事ハ無之、何程長日ニ相成候ても決てヤツコ一抔ニ掛候事無之、是迄葉車之ヘリ候故也と申、五月良平登候□故下候節差下可申候、五ツ頃休

同十一日

晴天、例刻出仕、五日出日之処長澤之為不出、九日出日之処下剤掛渇候て引込、此方兎角不順時候ニ御座候

【第三十一冊終わり】

【第三十二冊】

「卅二」（朱書）　「四月十四日立御飛脚同廿日夜着ニて廿一日秋保より達候」（朱書）

四月十一日

例刻出仕、御用無之、男四郎此頃干小鰈之礼申、珍敷御品ニ付上へ差上ト申ニ付笑候、小鯛之節モ毎度也、榊原モ上ヶ□□、今日　御城ヨリ御戻遅く相成候ニ付八ツ頃一同引、直ニ榊原ニヨリ、此頃井伊様日光へ被参候事沙汰承居候処、明十二日ニ御名代として被参候由、見物ニ参候積もいたし候得共、退考へ候ニ大込之処へ参候て万一之事有之ては相済（不脱カ）と存相止候、七ツ頃帰、久蔵呼出し江ノ嶌鎌食（倉）八幡行聞候事申達、男四郎内々相談いたし、御家中ニて是迄江ノ嶌へ日帰参候者有之間敷、万一ノ節御用可立人ニ候、江嶌之名物一品持帰候様申付候間、内々御土産ニ差上させ度と存候、如何可有之哉と申候処、誠ニ珍敷人也、至極可然間尚又御申付可然と申ニ付委細云々申達候、天気は如何可有之哉、南正（西）ニ雷鳴、北方天気能

同十二日

晴天、五ツ頃浅草目付前井伊侯日光御名代先陣木俣渡佐（ママ）、鉄炮備二組、侍組壱組、五十間余置鉄炮備、徒銘鎗携、ミニヘール十五挺位、持筒対道具抔無之、鎗三本前ニ立、井伊侯馬上、小性廻り歩行七八十人位、騎馬一行九騎、駕籠も有之、殿家老家来召連、惣勢何程可有之哉無勢也、いつれも麁服感心なり、三内へ一ふく呑ニ参候処六右衛門・甚兵衛・十兵衛来ル、四ツ帰り、直早昼飯給、大炮組之剣術御家老衆検分ニ付新稽古所出席、人数七十五人出ル、八ツ過済、直ニ榊原へ寄、茶を呑居候所へ　上之御乳より御庭より取候とて細ふき煮漬遣ニ付から口給、庄内之友江之ふき思出しぬ、今日御飛脚着、御前様十五日御発輿之義来ル、此節専ら風聞ハ京都より妻子召為登候事は長防も尓今鎮静ニもなり兼候間相止候様御沙汰申越候由、近々弥御上坂之儀、大樹公も御開敷事ニ御座候、御留守中御締別て厳重と可相成候間、両人とも下候事はとても出来申間敷、御仕合と京都御供之御模様無之候得共、何時被仰付候も不知、馬は駿足建物ニ御座候、金ハ最早不足ニ相成、困た事ハ光物斗、今日久蔵江ノ嶌へ飛行候間四頃迄可待とて白井弟二・松井養蔵・日向庄助・小花剛蔵呼遣、噺なから待居、五ツ廻なれとも不帰、皆々案事居、庄助等江ノ嶌見候事有之ニ付模様話し、五ツ半廻り来ル、久蔵帰りしと申ニ付皆々出て雨戸明逢、土足侭右之手ニは挑灯持、左之手ニは重箱二ツ重位之物風呂敷ニ包持、当時流行之深キ塗笠合持、麻之割羽織一単半纏、浅黄股引立付ヶ、白足之草鞋掛ニ草鞋、如何ニも庄内侍キツチイ出立也、□六ツニて支度、品川番所ニて手間取、江ノ嶌迄一走りいたし、四ツ時□越申ニ付先達頼、拝所不残拝、岩穴二丁余入候処鳩十羽程居処有之、不残見候て岩本院ニ寄札請、所之名産貝細工整、食事いたし処、昼より少廻り鎌倉八幡ニ何方角より参候哉承候処、向之山道より参候処なりと申ニ付又走り出候処、道数本有之、とんと不知れ踏迷ひ、其内日蔭も八ツ頃ニも相成候模様ニ付無拠東街道方心差、漸本道ニ出、不残念八幡参兼、大森より暮候て漸駈付候、人之噺ニて八幡迄十八里、鎌倉より江嶌迄三里と申候得共、左様は有之間敷鎌倉迄ハ十四五里ならて無之、江嶌迄十六里位ニ可有之、迷候て余慶之道走り、都合往来ニて三十五六里も可有之哉と申、草臥と承候処、股少立候と申、休候とて帰ル、一同感心

なりとて噺いたし皆々帰、伏し

同十三日

晴天、久蔵来り　上への上物二品、我へも貝細工屏風一持参、外江ノ嶌之絵図一枚持参、是より板橋廻りなりとて帰ル、夫より支度、例刻御殿へ持政府へ上物之事一通申述、御小性頭へ取斗為差上候処、御満悦之趣被仰出候、引取割籠開ニ榊原へ寄、宿地走ハ篠小鯛・アイナメ（アフラコ）之事塩振焼、其外色々指出、食事済、半兵衛来ル、夫より榊原御普請所へ参候と申ニ付一趣ニ参らんと茶出菓子食ひ帰、（十軒店）十間棚之五月槍鍔目を驚し、誠二三両位之分悪敷、三四十位之分如何ニもよし、帰昼寝いたし、七ツ過丸子忰参ル、大風砂吹込、暮過追々人集、久蔵・甚兵衛・楫右衛門参ル、今晩抔出火候ハ、何程焼者ニ哉、誠（そ脱カ）おろしきと噺いたし内チヤン〳〵と金ヲ敲、ソラ出タト屏（カ）より見候得共不見、□□（井楼カ）ニ小一郎等参候得共火無之と申、余り風強キ為ニ要心之為ニ敲候半と噺いたし、五ツ過皆々帰、燈下草紙見て休

同十四日

曇、今日も不替沙塵飛て家之内サリ〳〵いたしイケマセンヨ、今日朝政（カ）は又右衛門・権蔵へ

【第三十二冊終わり】

【第三十三冊】

（朱書）「卅三」

四月十四日　（朱書）「廿四日立御飛脚廿九日着ニて達候」

曇、昼過書状出し、風弱相成塵不飛、少しいたし次第ニ天気ニ相成、十兵衛昼過噺ニ来ル、渡部久大夫より雑喉一皿至来、三内参ル、十兵衛帰、雑魚焼振舞、五ツ頃より甚兵衛・伊兵衛来ル、四ツ過帰、休

同十五日

今日月次　公義も御家も御法事ニ付相止、朝之内曇五ツ頃より晴天ニ相成候、人通を出格子より見居候処日々不相替異類異形人往来、川は屋形舩・売舩引も不切、其内浅草目付之方より異形之ばゝ共四五人連立来ル、庄内風也、往来人立見いたし候体、頭ニ浅黄又は白地紺形ノ手拭いたゝき、腰曲竹杖突、いつれも五十位之ばゝとも也、庄内之者ニ有之間敷哉、都抔参候て誠異形なる者也、先頃も同風之者七人斗御屋敷前通候、福井梅とら抔御供連、民よこ高の参候ハ、物見より人見可申候得共とてもはじかしく、外へ出候事御座候事出来間敷、民よこの毛落候哉、丸まけ女ニこの毛有之者は壱人も無之、此考」方候へは蝦夷とか大島者よふにおもわれ候、半蔵出申聞候ハ、只今酒田磯参候て、此度善光寺参詣いたし候ニ付東都へ寄、御伺ニ出候とて米」金糖一箱持出し、只今とんと不済め田舎者前を通り不思義ニ存候、扨々磯ニ哉此方へ通し逢候処、昨日此地着、只今酒田御足軽之先達ニて上り候とて久振ニて逢、道中ニて落馬いたし候とて左之手をはらし、今出格子より見候処、庄内風者通候故不思義いたし居候処也、とんと都ニて見候ては異人同様也、往来人々いつれも立見いたし大笑いたし、浅草も近辺、吉原女郎張候所見候様申処、昨日着宿迄之処女子共見候、いつれ芸者と思と申、芸者甘物ニてとんと別者也、（馬喰町）馬食丁止宿候て只今柳橋通り候半柳橋吉原より行」流也、御留中見候様色々噺し帰り居候処、余り畳ミきれ候間為替候て塵立候、周作今日出勤いたしとて来ル、色々噺いたし帰ル、五ツ過休（図21入る）

同十六日

曇、又々風吹沙飛、出格子前なてしこ売通、誠ニ美事なり、庄内ニ有之違小茶椀位之鉢植ニ花の百も付たるあり、榊原より里噺ニ参候様申越ニ付昼後より参らんと返事をいたし、八ツ頃より参ぬ、榊原申ニは今日為

見馬参候積之処候得共先ッ源五兵衛為見遣候と申、無間常木来て八九疋見候内壱疋栃栗毛ニて目立候馬有之間、近キニ率来候様申候て参りぬと申聞候、甚兵衛も来ル、地走は柳川也、六ツ半頃帰、渡部久大夫へ雑喉為挨拶何廉遣候様半兵衛へ申付置候処遣候ニ哉、又其礼なりとて向嶋之桜餅一籠持参候趣小一申聞候

同十七日

天気よし、藤助来ル、伊勢屋来ル、例刻出仕、御用格別無之、今日両頭壱趣ニ御用所呼出ニて書付被渡候、御留守中御家一手ニて市中御取締被為蒙仰、諸家は御引揚書付被渡候間、諸士へ申達候、下候事抔さて置、八月迄定敷と閉口いたし居候、又々長州始り候ハヽ何時登候も不知、今日々々明日々々世中、横濱益繁昌、市中一町ニ唐物なき所無之、公辺役人賄賂取候事日々ニ盛かん也、御家取締行届候ても全（註）も無之様愚考いたされぬ、昼過引取、織人来ル、藤助来候て刀之鞘頼遣、三内へ参候処半兵衛来居、明日本所参候約速なれとも断候積ニて参レト共無拠参不申ハならひ釣（な脱カ）合ニ相成候、暮頃帰、御組寄合ニて来ル、久蔵・源之進・十右衛門・安兵衛・定之進・金弥・伊三郎、四ツ過帰、風止候てよき心持なり、砂吹候て頭白髪よふニ相成候、畳は縁頬さり〳〵いたし候て足之踏所なし、天気能候へは定敷ニ砂飛申候、庄内抔は風吹砂飛、ハき候事抔一ヶ年一二度ならて無之ものを日々日ニ幾へんとなく掃除いたし候、御上屋敷へ出仕懸向風とんと吹雪ニ向ひ候同様ニ御座候、刀之柄抔ハ塗ニ無之ハ埒明不申、雨は横なくれニ飛、砂塵犬くそ吹付られ、造酒助抔庄内居候頃は色白よふ覚候得共最早黒坊のことし、髪は小一郎大体剃被落、ひん毛漸四五本ならてなく相成、下候ハヽ皆々笑れ可申、月代頭毛も余程はけ、如何ニも四十三四才としの格子ニ相成、先々寝て過宝待たんと夢中（図22「ものくさ太郎夜頭を叩て歎息之図」入る）

同十八日

天気よし、申合ニ付本所御出入之大工の堀へ半兵衛先達て参候積之処、半兵衛御用有之後より参候趣ニて我・三内・伊兵衛・猪蔵・甚兵衛・林蔵・鯉兵衛・六右衛門・九郎治と参候処、先ニ十兵衛・半弥・仲蔵参り居、小屋ニ薄縁敷、昼飯は汁・土鰍煮〆・竹ノ子・いか・ふき・焼とふふ・蓮根二砂鉢、韮一砂鉢、堀汐引ヲ見カへ始メ候処小雑魚三升斗、鮒二十枚・鱣小之分と都合八十本余、鯉尺余之処八本、誠ニこのましく、庄内之大工抔と違、菓子色々出し、半兵衛役候得共不参候て八半過断申越、無拠大振之鯉三本君へ差上ル、半兵衛へ御地走と鯉二本遣、宿へも鮒と鯉と送ル、鱣数多く、しろと（素人）料理ニハ不出来と申ニ付鱣屋者売人呼寄候て前ニて料理を見んとて申付、早速来ル、奇代奇妙、艸煙三四ふく呑候内不残出来、鯉洗身申付候処鱣屋之為ニ哉手ヲ余程切り出血不止、我懐中のコハン抔出し付ケさせ候得共不止、秋保猪蔵料理人ニ代り洗身料理し刻限ニ相成雑喉汁出ル、鱣蒲焼即席（カ）其外さわらと竹ノ子てり焼、鯉洗身、酒始り賑々敷、其家之娘ニ哉両人仕」宮酌取ニ出候て別て興有之、七半過ニ相成候間帰ル、六ツ過休

同十九日

鬱陶敷天気、夜中は少々雨降候模様なり、閑日ニ付駒形拵御人数出調ニ掛居候処へ三内両遠眼鏡二ツ持参、甚蒸あしく単物一ツニて額もや〳〵いたし、十兵衛来ル、三内帰ル、麁飯出し蛤汁也、儀右衛門来ル、十兵衛帰ル、藤助来り御子達之さし候刀出し若御入用ならハ上ヶ可申と申候得共入用無之とて挨拶いたし、権蔵来ル、藤助帰ル、権蔵も無間帰、扨々今日は朝より調物いたし居候処無際限人来り、亭主ニて日暮しぬ、御触来りて慶應元年と改元也、五ツ頃床延させ休

同廿日

曇、駄賃取馬いさかひニて目覚し、面白し、早速止ミ、今日為見馬参候趣榊原より申遣候間昼飯給候て出掛、榊原へ参ぬ、七ツ近く馬来りしと申ニ付御馬場へ出見ル、一番ニ栃栗毛仙臺出六才前働ともよく候へとも差首也、前爪立、二番目之馬も黒ク方之栃栗毛南部出六才小ふりり(ママ)也、自道之内ハ前働不申候得共段々働、早ミニは余程前とも共きゝ、早ミも勝てよし、首之釣合よし、当テ物もよく候得共不見、其上ニも鉄炮太鼓車道中も弥よくハ七十両ニて求可申、其余ニ無之ハうる事ニ不相成ハ相止可申脇方ニて六十六両迄と申、如何可有之哉、暮頃帰、甚兵衛来ル、一申候所有之趣ニて
趣ニ三内へ参ル、五ツ過帰り休

同廿一日

曇、今日駒場野へ　御成行軍御覧之由、先達て大荒、今日も如何可有之哉、例刻出仕、昼過引取、雨ニ相成、源四郎鳥噺(渡脱カ)ニ来ル、雨段々降増、御駒場　御成なんとも(カ)雨降ル、今日扇き之御馬印も出候由、長防之為来月十六日御立之趣、御留守中御家一手廻りニ相成候、水戸之御城受取とも申、相成丈市中御取締ニて御勤為済申度と存候、三内来り、麻羽織頼置候ニ付地合と色帳持参、夫々頼遣、夜食過世話役来りて山中源大夫不快ニて昨冬より廻等勤不申、折々大たれいたし弱模様ニ相聞へニ付下候方可然と申遣、如何可相成哉困候事ニ御座候、在勤ニて弱程難義無之候、私至て丈夫ニて皆々ニ大笑われいたされ候、家来ともいつれも丈夫ニて御座候、他行も懐中乏敷為ニ哉無之、御門外出候ては如何成人も金をつかい不申人無御座候、困所ニ御座候、四ツ過休

同廿二日

雨追々晴、今日御飛脚立ニ付御備組今一組催促申遣、昨日諸士へ鬢広く髪結様、異服不着候様申達候、昨年より隼人と色々相談候為直候様可致と存候得共余り之世話も違、如何可致存居候内御家老衆より被渡、即申達候、第一辻庄一郎・諏訪部司馬・竹内之小坊三人位ならて無之、御給人随分有之候、此節一同笑噺有之面白御座候、庄一郎十日引込候て剃落可申と申事也、竹内小坊ハ兵衛前ニて剃被落夜着かふり寝候と申事ニ御座候、三内使番三内手剃致し広いたし候処何分御頭之事故一言不申苦々敷体なり抔、昨日今日いつれも鬢剃ニ御座候

【第三十三冊終わり】

【第三十四冊】
(朱書)「卅四」

慶應元年乙丑四月　(朱書)「四月廿五日立御飛脚五月二日夜着」

廿二日

今日御飛脚立ニて御伺ニ書状差出し、三内へ参り甘物無之哉と申候処黄粉重箱有り、寒晒も有しと申ニ付伊兵衛団子拵ニ相成、早速出来ル、半兵衛来ル、御普請場へ参候処於鉚さま御居間出来ニ付御便所一間半過深く、猫投出候様也、板之穴七八寸ニ一尺位ならて無之ニ付御姫之大尻之よふ噺ハ有之候得共、是へまたかつてハと一同大笑いたし、火取寄候処茶ニ菓子出候、其内三内へ具足屋参候て北条頼政之着領参候と申ニ付皆々参見ル、二領持参、二枚胴ニて前ニ不動打出、胄ハ龍打出、袖無し、籠手クサリ、はひ楯クサリ、今一領ハ胄六十二間筋打出、前胴ニ明之字打出、籠手よし、袖なし二枚胴ニてとんと不面白、早々帰五ツ過休

同廿三日

曇、例刻出仕いたさんと存候処へ十兵衛来り少噺いたし帰、即神田橋へ出ル、御用所へ出候処、兵部殿日光噺、天狗雷始り大笑いたして御小性頭詰所へ参候処、隼人申は此頃栃栗毛　上ニてもホシク思召候哉、貰候事出来間敷哉御意之由、御遠慮被遊候由、加賀と細川・造酒助殿と三家

ニてネコミ之由、十七万石格抔ニては御売（買）上御六ヶ敷事なりと大笑いたし、男四郎申は上ニては未御早く、とても御手ニは叶申間敷候間不成々々申居、造酒助もか丶（加賀）と細川ニ肩並候程気位おそろしき底脱罷在候、乍去近々断可申越候、加賀・細川へ八九十両位ニて参可申、此節五六十両ニて参馬より能候得共、大金出候程馬ニは有之間敷、私も大馬鹿と可申、竹内も引込養生いたし度旨内意申聞候ニ付権十郎殿へ申述候、倉右衛門近々登候事ニ可相成候、榊原へ寄弁当開、鯛之味噌漬地走なり、弥吾来り、半兵衛来り、弥吾兵部さまより日光之御土産貰候とてさし出、日光よふかん一箱、南蛮一箱、即開風味いたし、よふかんハかふけスカク相成候間モシコシ能品貰候様申候て大笑いたし、兵部さま三四百両借金いたし候由、此度不参とても宜敷候得共、物好ニて参候風聞ニ御座候、三内より参候様申越候ニ付参ル、土産名物松之寿し一折、御相伴は庄右衛門・甚兵衛也、鬮ハ海老ノテンフラ一器之内、宿之地走ハ大真鯛之両身之あんかけトンカラミ潮煮、珍敷大食いたし、日本橋市ニて二番通り之大鯛之由、盛り之処へ権十郎殿より紙面、明日殿様御用之義被為在、五ツ半時御登城、御老中御連名御奉書御至来ニ付御役人之面々殿中服紗小袖麻上下、同役へもと申越、夫々申達、九ツ半過迄居帰休

同廿四日

天気よし、四ツ頃［　］御殿へ詰ル、御用之程不相分、隼人申ニハ此頃之馬七十両ニては上兼、八十両と千疋ニ無之ハ上候事不相成趣申ニ付、源五兵衛呼八十両抔ニては求候事不相成候間断候様頼遣しぬ、八ツ過漸御用相知れ　御留守別て入念、折々登城いたし候様於溜之間御大老御老中列座申御渡候由、其上於御居間ニ御懇之上意、恐悦奉存候、御戻、御居間ニて被召出候て御祝義申上候、其後引取、隼人・三内・半兵衛・源五兵衛と団子坂参らんと八半頃より廻り、植木屋見、池之端より廣小路ニ出、暮頃帰早速休

一、定紋形不足いたし候間幸便ニ二十枚も為御登可被下候

同廿五日

曇、今日御飛脚立之趣、例刻出仕

例之通落字不文にて御免可被成下候

【第三十四冊終わり】

【第三十五冊】

（朱書）「卅五」

四月廿五日　　五月廿五日源四郎下ニ付達

今日御飛脚立ニ付書状認上ル、例刻出仕、昼ニ引取、兵衛書付一条ニて榊原へ参居、兵衛相糺候義有之挨拶申上、権十郎殿出やら、又々壱人役ニ相成馬鹿〳〵敷働致居候、昼飯給候事忘、隼人被大笑いたし八ツ過給、甚兵衛と一趣ニ柳原へ帰、道は本町十軒棚五月鍔目驚し、筋違へ通し土堤通り面白物色々目堪忍し帰ル、藤助・小六夜噺ニ参ル、九ツ頃帰

同廿六日

天気よし、楫右衛門・権蔵・金弥、山中源大夫長々引籠とんと御用不相成候ニ付養生下候事ニて参ル、松宮源大夫・十兵衛御備組之下一条ニて来ル、源大夫帰、十兵衛廻方調ニて七ツ過迄居、山本権蔵来ル、三内来ル、今日少々寝冷いたし鼻気之処終日亭主大草臥ニて暮過休、一寝りいたし処岡吉と申案内ニて目を覚し、風気ニて臥しとて返し今朝御足軽着ニて御書達、有難奉拝見候

同廿七日

晴天、山中之事ニて又々権蔵・金弥来ル、今日引込、隼人へ頼遣、昼頃より岡吉来ル、八ツ過迄噺いたし帰ル、早々伏し、起し候者有之、誰ニ哉目覚し処、権十郎殿より明廿八日月次被為　請候旨被仰出候旨申越、十八日立御飛脚着とて御書達、有難拝見いたしぬ、蚊ニかゝられ八ツ過迄ネソケル

同廿八日

大雨、十兵衛蓑笠ニて来ル、用弁し早速帰、伊兵衛見舞とて来ル、長話ニ相成、空ニ相成（腹脱カ）候間、昼過候哉と申候処、伊兵衛昼飯給脇方へ出候て九ツ半過ニ上り、只今ハ八ツ半過ニ可有之と申ニ付早速惣吉叱、先日昼飯忘、今日も又遅候事余り成り、松の寿しニても取寄候様申付ル、三内も参ル、七ツ時ニ寿し来候ニ付振舞、我漸腹ニ力出候、半頃皆々帰、又伊兵衛大肴駕籠持来りて申ハ、先日上へ鯉上ケニ御移りニ被下候由ニて半兵衛より申遣、隼人より宜半分分ケ候趣申越とて大ふり半身（鰤）、コチ一尺五寸位壱疋、鮒ノ子一尺余壱本、大鮑一はひ、尓今腹ハ十二ふくいたし、面（カ）々昼飯忘候て大タメいたし候、いつれ料理申可付候とて、ふりハ竹ノ子と煮付、鮑水貝、コチとセイこハ豆腐入汁、連中早速膳と飯・酒持参候様申遣、追々集、三内・伊兵衛・甚兵衛・林蔵・九郎治等也、鯉兵衛、鍋之助ハ板橋廻りニて不来、六ツ過漸出、皆々大食し候、煮付汁も残し、御上屋敷ニても榊原へ集候半、誰々ニ哉指折ニ半兵衛・長十郎・仲蔵・半輔ならん抔□大悦いたし候て帰ル、造酒助床ニ入、腹クシク不寝、鼻風何方へか飛去申候、先頃雑魚取、又今日　君より被下御肴如譬まかぬたねはへじ、大工へ反物二反土産いたし候、礼なりと考

一、近々御飛脚立可有之、日光相済、誂物も持行かん、下物を考なから夢中

同廿九日

晴天、風邪快、髪結居候処甚兵衛来り即帰、昨夜考候下物夫々申付ル、当春被仰出候茶整ニ遣、山本揃・永楽・蓬莱揃ノ三品、菓子二ツ、銭亀永代橋為見遣、セキ駄尋ニ遣、凧絵なし、其代ニ亀遣候方可然、弓矢多へ土産ニいたし可申と存整置候小笠原本小倉縞から不宣候得共一反ならて無之ニ付仕立申付ル、亀此節無之ニ付田舎へ注文申遣、十日過ニ五ツ参候事ニ御座候、世話役集ル

同晦日

○天気よし、兎角人々ニ被仕掛、今宵早く休（図23「造酒助飾道具左印」入る）

右之品々整候て大物好之様ニ御座候得共御上屋敷人々より見候へハ金ヲツカイ候と不被申、誠奇代之世中、兵部殿初織人抔我金持付候て、内心少差障候事も御座候間、不揃ハ馬ニ御座候、此度ハ御供も不被為蒙　仰候得共、長州一件も如何相済候事ニ哉、　将軍家ニて御旗本備ニて御誅伐之由候得共、御家之事ニいたしては何時御進発不被□□候も不分世中ニて、是非駿足求度、旁七十両出候（ママ）さんといたし候得共、能馬ニて八十両余ニ無之ハ商じと申、無拠金は尓今百両余□御座候得共、七十両ニて商と申越候ハ、織人より借候事約し置候処□□（断カ）相成候て金も借り不申候得共、此方ニて先ツ借候て間ニ合候積ニ半蔵と密談いたし置候、殊ニ寄為登金之義申上候、難斗候得共先ツ前文之次第ニ付御見合可被下候、金持と被付候て益無之候、物入いたし候事荒増図面を以申上置候

五月朔日

雨天、今日も引込、伊三郎、兵吾来ル、色々御用有之控落候

同二日

曇、御用有之出勤、権十郎殿へ参候、隼人へ寄帰、雨

同三日

曇、例刻出仕、御用有之、隼人へ寄、暮頃帰

同四日

曇、三内・甚兵衛来ル、昼頃地震、飯後本所ニ三内・甚兵衛鉄炮力様ニ参り、又八ツ過ニも可有之哉地震、柏葉餅食し、刀様見候て帰道より雨、暮頃帰、源大夫来ル、添状等相渡、此節歩行願中、兵部殿より明日御風気ニ付御登　城不被遊、御内輪御目見無之旨申来ル、休

同五日賀

天気よし、書状認、源大夫へ頼候事さし遣候処、立候趣申越、御足軽之神尾東作立候趣ニ付誂候、今日御目見無之、御用無之ニ付休、柏葉餅取寄遠月堂名有之、庄内ニて拵候大違風味結構也、一ツ十銭余宛也とて半蔵毎度肝を消し居候、先達て整置候鍋御下被成候方可然と半蔵申ニ付能よふいたし上ヶ候様申付ル、○此鍋三ノ間ニて鳥渡いたし物御手じから煮物被成候ニ便利と存候間三内頼整候、下候節二三枚も求度と存居候、又右衛門・兵介・岡吉・三内・権蔵、為祝義来ル、出格子明見渡し候ニ其処々々へ大小鯉一疋宛提ヶ置候のみ、庄内と違こはた抔無之候、内銜ハ美事ニて、とんと三月も同様ニ御座候、甚兵衛より牛房一平木送遣候

同六日

晴天、権蔵来ル、又右衛門来ル、岡吉干小鰈三枚持参、十兵衛来ル、春之助夜噺ニ来ル

同七日

天気よし、又右衛門・兵介来ル、伊兵衛来ル、例刻出仕出勤、御用有之□御飛脚立、兵衛一件ニて色々御用有之、旧臘達違ニて□□申述、初登御備五人着、追々登下有之、御物頭も追々下順出し、最早役所取込ニ相成候、兵衛下ニて御組も一趣下候事、当席定と申□不及候得共、何分ニも市中御一手持被為蒙　仰居候上は只今御人数交代不登候処、二十人も下候事ハ目立　公辺被為対よろしかる間敷と存候ニ付、武者組法（カ）ハ（兎角）トニ角御勤大事、造酒助心通致候事、男四郎内談候、若武者組規定崩不相済申事ニ相成候ハヽ、私引受、御組留候半と工夫して帰り、権蔵来り、明日廻り候得共越中島へ手伝参度と申聞候ニ付聞済、又右衛門・甚兵衛、三内へ噺来候処、九日越中丁場打支度大取込、暫噺いたし帰、東風強、今宵御組寄合ニて来ル、四ツ過帰、休

同八日

天気よし、伊兵衛・甚兵衛来ル、大介来ル、庄右衛門来ル、順吉来ル、東風強し、塵飛ザリ〳〵いたし、平五郎来ル、七ツ過本郷出火、賑々大火ニ可相成と存候処出所能早々鎮火、夜又右衛門・兵吾・甚兵衛来ル、四ツ頃迄色々噺いたし帰、明日之越中嶌大丁場大模様し曇候て無覚速（束）相成、雨之音いたし晴雨ニて不参不相成候趣困候事也

同九日

丑ノ刻頃支度、雨少々降、七ツ頃より三内父子・権蔵・林蔵・九郎治・鋤之助・鯉兵衛と越中嶌へ参ル、大森と違東都御第一大場所御座候、兵部殿・権十郎殿・隼人・男四郎、三役不残出ル、　上様も昼後　御出被遊候、公義役人も三人出ル、玉数百三十余手間取百程ならて不打、大玉ハ一表目位五発二十丁余先ニて発、五丁ニ栗ノ六寸角百本二間半ツニ焼玉打、不残焼、小火事のことし、君面白思召候由、七ツ半過不残打兼御戻、三役戻り、雨も不降、一同悦帰、暮帰帰（ママ）早速伏し

同十日

雨天強し、三内・甚兵衛・権蔵来ル、昼過周作・□（十カ）兵衛来ル、源四郎来ル

同十一日

天気よし、男四郎用事有之五ツ過御上屋敷へ参ル、用弁事御殿へ詰、今日は此頃無之大取込、武三郎・為弥・清士(カ)御殿へ届出ル、割籠不食八ツ半頃帰、山本権蔵来ル、市郎兵衛呼出達、余り世話敷候間御普請所へ多葉粉呑ニ権蔵連、三内と半兵衛先達て不残見廻り、十六日皆出来候事今日御達とて半兵衛大気モミ也、御便所漆塗候処と申故御股抔カヒケニては困タ事と□笑し、鋤様御居間大抵出来、御縁頬前夜燈居へ、石付之最中の働故先そら〳〵見候て帰、庄右衛門・藤助案内いたし、源四郎へも申遣候得共板橋廻りニ断、鯛汁いたし舞振(ママ)、四ツ頃帰

同十二日

雨天、丸子ノ松斎来ル、御飛脚昨日着、御状達、小六・三内・甚兵衛来ル、為弥より御状達、干噌」味届

三通とも書放不文落字御免

【第三十五冊終わり】

【第三十六冊】

(朱書)「卅六」

五月十二日　(朱書)「五月十五日立御飛脚廿四日着即日達」

折々雨、綿入着し、源四郎父子暇乞ニ参ル、御機嫌能書状認、七ツ過下谷住居源四郎へ書状と銭亀銚なから暇乞ニ参ル、早速帰り、三内ニ寄、ミニケール丸子へ注文いたし候処三挺出来□□三内納候趣ニ付一見いたし即帰、暮過休

同十三日

天気よし、十兵衛来ル、例刻出仕、単物ニ麻肌子ニて朝日背中難堪し、今日は　御進発前被仰含候為ニ哉、御登城被遊候由、次ニ当時三家老之権大夫も御登城之由、十右衛門明日立ニ付添状彼是御用のみ、昼過引ケ、御下人之義ニ付榊原へ寄、食事いたし、追々曇雷鳴数声、練餅至極宜からんとて取ニ遣候処間違、唯菓子参り、大笑いたし食、甚兵衛も参ル、雨も小降ニ相成候、色々工面始り、十八日三内ニ参り地走ニならん八月迄詰下り被仰付、五十表上ケ米被下置候処此頃越中嶌ニて丁場無滞相済候御祝義と申事、先日半兵衛隼人へ参り三内詰下りニて五十表貰候間、五両位御地走いたし候ても可宜と申候より三内かゝら

一、鯛薄塩煮

一、鱣大蒲焼

右之通御引受可被成候

(献立)

来ル十八日

食連中　○半兵衛引受人之由ニ御座候

片岡半兵衛殿

雨晴候ニ付七ッ頃より柳原へ帰、都筑林大夫・深井鷹之進・松平勝助着、中田先生も着候由、都筑始三人案否尋ニ参り御書届呉候、早速半蔵申付鮓之名物松之鮓百疋分折入ニいたし林大夫へ遣、半兵衛御普請之為詰居候間呼候て、隼人殿へ参候処、三内五十表之御地走引受人之由ニ付別紙之通こん建書いたし候ニ付宜御取計大笑いたし出候処畏候てとて持帰りぬ、三内頭ヲかき可申と存居候、林大夫より焼麩十枚、塩釜一包遣、却て心配かけ候

今日承候は定右衛門御供立帰候由、嘸々弓矢多御頼被遊候半と存居候、暮過権蔵来ル

同十四日

晴天、甚兵衛来ル、勝助ニ被頼同宿いたし度、別ニ思召も有之間敷哉と申聞候て□□(至極カ)可宜、万事引受候て彼是無之様可致候、教示ハ大事と返事いたし即帰ル、今日御泉水雑魚かへの趣向ニて十兵衛・半兵衛等参ル、御庭出んといたし候処へ権十郎殿被参候て被申候は、昨日御城において

大小御目付様廻り方之義御糺ニ付委細申上候処、弥十六□□□御進発、五ツ時之御供揃ニ付ては明日より十日余候処、是迄より重々為相廻候様ニと御沙汰ニ付、第一御勤之義為骨折為廻候様被御申聞候間、夫より廻番繰書認直、権殿即帰、十兵衛を呼、雑喉取ハ半兵衛等掛、私と十兵衛ハ番繰いたし、一日十三組廻いたし候、取調気詰ルと鳥渡走り御庭ニ参り、雑喉取見ル、塩之差引有之処故風味よしと申沙汰なり、一尺余鯉四本都合五本取、鮒数何百枚ニ哉数不分夥々敷事也、小雑喉二升余も取、若者大勢ひ大働キ也、鱣□本余も取、其内又走り帰調、又行見ル、暮頃御料理も出来ル申越ニ付御物見大座敷集ル、私・十兵衛・三内父子・半兵衛・甚兵衛・庄右衛門・源太郎・弥太郎・権蔵・徳弥・季治・源大夫、大鍋ニて雑喉汁、其外鱣蒲焼、鮒雀焼数百串地走、甘ひ〳〵と皆々給、造酒助閉口、其内諸組世話役集ニ付御長屋帰候て番繰書調、八ツ頃迄掛り漸出来、休同暮頃明日御留守中御條目被仰渡候間四ツ時御殿へ被出候様御家中へ達候様申来ル

同十五日

晴天気、帷子道難堪、例刻御殿へ詰候処、只今深川より雅楽守様御家中と誰様御家中と申又強談と申、不知候得共明日より御留守之処最早始り申候、市右衛門詰所へ出候間手ツキ候処チカンと手ニサヽル物有之、見候処誰ニ哉針下申候、紋付帷子紬也、市右衛門より今日御人数聞候哉聞候処、向嶌辺住し浪人之由、常ニブタヲ商ひいたし候者之由也、今日は大取込兎角此頃は取込ニ相成候、今日御出入紀伊国屋へ榊原抔と参ル積いたし、御戻御目見申上候、今日大取込ニ付別書状不申上候、唯向暑奉伺御機嫌候、以上

松平造酒助

御両親様

尚々幸喜之奉期時候、一同無事御座候間乍恐皆々へ宜奉願候、今日御発輿ニて庄内ハ御賑々敷可有御座候、林大夫着之節御返事も追て可奉申上候、以上

【第三十六冊終わり】

【第三十七冊】
（朱書）「卅七」

五月十五日

御殿より御飛脚立へ御伺書状差出し、御用済より榊原へ寄、紀伊國屋へ参候積ニて多門・権蔵・弥吾・小大夫・秀策参候得共隼人大坂へ為登人之為ニ不引取、余り遅々相成候間秀策と小大夫御先番ニ遣候ぬ、八ツ頃隼人漸退出候、十兵衛と皆々参ル、三河町砂糖屋也、店より入候処座敷有之、誠猫額程之家也、座ニ付候処家内出、夫々挨拶いたし思ひ〳〵土産出し、羽織袴取二階ニ上ル、階子ノ上二八斗のねひさん（姉さん）二人大メカシニて居、町方地走ハカクアランと思しに果してと反上ル、其女とも宮仕、多葉粉盆・茶菓子差出、近所娘ならん、壱人の女ハ十六七歳位ニて前髪二三寸ニて切り、左右ニ分、チンといたしたるカンサシヲ□ヲ後ニキリマノ大かんさし横ニさし、シマタマケニは金紙大縄目錺掛、首白粉ヘケル程塗、紺地ニ縦横の水浅黄大縞の木綿縮着、帯ハ縮緬呂（カ）フクの昼夜を〆、縮緬の紅と白との紋の帯〆ニ銀ノ薬籠ニも可有之やチンといたしたる提ケ、腰中よりチョンと紙入出し、腰に提ケ候同様之いん籠鎖ニて提ケタルアリ、腰ニチョヘと扇子差、折々紅の燃立斗□（物カ）をヒルチヤラと出し、声ハ男よふた声也、不思義也、いつれ唯者ニは有之間敷、無慙ハ猪口ノ縫跡有之、今壱人は前同様前髪冑虫のことく左右ニ分ケ、二寸余之金焼付サンコかんさしを頂、縮緬之紅ニ白の鹿子□（縞カ）の引サキヲ島田ニ掛、是も白粉如前、後ニ金焼付し大かんさしを差、紫地ニ水浅黄大縦横

縞のお召縮緬、帯ハとん(ママ)と可申哉茶地ニ唐艸模様の織物帯〆、紫と白段打の打緒結、薬籠紙入の提タル所前同様、腰ニは扇子挟ミ、袖は大夫のことし、十五六才とみへル○吸物出し、蓋ニからし付、酒を出し○砂鉢○玉子焼○魚膏(カマホコ)○猩々角豆○氷豆腐よふの物、五品○砂鉢○海賊(ママ)○竹ノ子○砂鉢刺身、夫々取合○鯛濵焼○砂鉢○大鮴(イナタ)のてり焼、夫々取合○茶椀魚身ニ豆」角○座付吸物スゞミ貝也○蕎麦出し○飯出し○

酒出候処ニて軍談師一座講し引、夫より両人宮仕女代ル〳〵しやみ線引、猪口女ハ大音、今一人の女小音ニて甘(ウマ)味也、皆々酔賑々敷興有之、腹如太鼓十二腹いたし、折角地走不被給、五ツ頃一同謝して帰ル、筋違所ニて都筑百之助と行逢候ニ付一ノ手召捕如何ニ哉と承候処、先刻私共廻りニ付向嶋通候処壱人召捕逢候と申旨わかれ帰候処、半蔵出、先刻御留守中注進有之、御組へ申遣候内逃候趣ニて再注進有之候と申

一、御留守中男四郎様より御手紙ニ候へとも御留守とて返し、被遣候物留置とて出し、手紙披キ見候処、兼て糟漬上候処為御挨拶御重之内被下置、私より差(カ)上いたし候と申文面也、御重箱見候処大重鯛と蛇長芋御煮漬也、十腹いたし、捨候事も不相成、何分暑気時節ニ相成候間煮返申付ル、休

同十六日

晴天、今日は御進発とて拝見男女如蟻往来引不切、兵吾参候間昨夜頂戴之御肴ニて精進おりを為致、兵吾家来昨夜御締後御門入為致候とて断書付持参也、四ツ頃帰、御徒目付源助逢呉候様申ニ付逢候処、昨夜兵吾殿御家来九ツ半過帰、一通相糺候処御上屋敷ニて酒呑途中ニて腹痛之為遅と申ニ付、外子細も無之ニ付御門入為致候処、只今□□(飯田カ)町新徴屋敷同役共より申遣候ハ、昨夜加藤五三郎殿家来と長沢兵吾殿家来、蕎麦屋ニて相客町人酒之上喧嘩いたし、其外御足軽目付抔も入、自身番之内棒持出、御足軽目付の頭上打出血いたし候を五三郎殿家来脇さし抜、町人両人を疵付、彼是騒中ニ兵吾殿家来其場より逃候(ママ)帰候事ニ申遣候間、万一にけられ候てハ不相済候間其趣兵吾殿へ御内々御門外へ不出候様可被成下、押付権十郎様より可有之と申ニ付、即兵吾呼、内話いたし居候処へ権十郎殿より兵吾家来御糺筋有之間其役向次第相渡候様申越候ニ付直ニ達（図24入る）

○三内之噺ニ昨夜新橋辺ヒストール筒玉込いたし捨置候ニ付自身番廻之者拾、町奉行所へ差出候由、昨日奇妙日なり噺いたし候

○榊原へ案内ニ付昼過より大暑不厭三内・半兵衛御普請ニて当御屋敷候故一趣と三人連ニて参ル、途中暑サ難堪参ル、即羽織袴取、足延休息、伊兵衛・権蔵・甚兵衛も来ル、御地走ハ鯛あん掛ニ鱠、木瓜ニキス、其外大イナタノテリ焼、塩鳥□也

○今日御進発拝見ニ大勢出、御陣羽織白麻とも申、又はセイコと申下ニハ黒ニて子持筋御紋金之由、色々沙汰ニて不分、御馬印扇子と半月と申、拝見ハ明七ツ頃より御通出、八ツ過迄居候為一同空腹ニ相成大難義いたし候由、五ツ頃帰

同十七日

晴天、例刻出仕、暑サ頭われるがことし、今日御物頭被召出着勤御礼申上候、君は十七日ニ付芝へ御参詣、多田禎蔵御供頭被仰付候、二十石御役料、昼後引取、暑、昼寝いたし、増川祐助参り、参候とて被起逢候処、今度　御進発ニ付当朝勝栗・昆布・熨斗蛇・安城御攻を吉例ニいたし献上仕候処、御老中直ニ御受取相成候、御吉例□(張カ)当候とて大悦、委細半蔵より可申上候、昨日榊原参候処殿中人目を驚しと申事噂は承候、暮過より御組集、四ツ過帰休

同十八日

曇天気、権蔵来ル、三内来て弥今日御地走いたし候得共、私御長屋手狭ニ付何卒座敷貸呉候様申付、御地走ニ相成候ハ、毎日も貸可申と挨拶いたし三内八月迄詰、下り被仰付候ニ付上ヶ米五十表被下候ニ付一同かゝり御地走為致候今日御殿普請出来ニ付御家老衆・御小性頭見分成りと半兵衛大騒也、殊ニ寄男四郎抔寄候も難斗候間、遠月堂一折抔取寄置、昼後最早来らんと存候処追々荒雲出雷数声風雨也、七ツ頃小降ニ相成、隼人斗寄、外衆馬ニて参とて帰、隼人父子、三内父子、亭主半兵衛、甚兵衛半兵衛も御祝義いたし候事有之、鱣一重持参大鱣蒲焼・鮒テリ焼・鯛薄塩煮、三内地走なり、四ツ頃迄ニて一同帰、即休

同十九日

晴天、昨日之雨之為ニ冷気ニ相成、綿入着参候人も有之、私一物着居候、兎角不同季候ニ御座候、此節庄内蚊ハ如何程出申候哉、此方至て不足よふニ覚候、御上屋敷・当屋敷訳山之由、当月十日頃より蚊帳（ママ）相用候、二階ニ住候人は尓今不相用処も有之由

○御進発御先手は当五日より毎日引も不切登候、今日も伯耆守様被登候御旗本勢九万人位之由、其外大小名大坂へ集候ハ、何万ニ相成候哉、将軍家姫路迄御出陣之処へ大膳父子出候て御詫申上、長州ハ被召上、周防斗被下候、只今より事々極居候沙汰ニ御座候、実ニ一寸先ハ闇夜御座候、又々昼寝いたし、惣身チカホカいたし、蚤かしらみ哉と見候処しらみ子孫生、さか〳〵夥々敷事也、一枚物へも数疋居、苦々敷かな、しらみたかりとなり申候、庄内ニ居候内ハ一疋も見候事なし、歎息してふんとし引出見る（図25入る）

○例刻出仕、御用格別無之、竹内へ鳥渡寄帰、難堪暑サ、暮過休

同廿日

曇空也、三内父子・権蔵誘引、今日は暑気格別無之ニ付是より他行如何と申候処可参と申ニ付早昼飯給、大通日蔭芝通り日蔭再通、龍吐水二ツ、日ヨケ扇子求、団扇ハ無之困候、常例出来合ハ数万本有之候得共注文通り品ハ無之ニ付求兼、追々暑気ニ相成候て難堪ニ付道より索麺求、御門へ入候処御先番之女中駕籠十一二挺有之、即料理申付、四人ニて煮候て給、四ツ過皆帰

同廿一日

晴天、庄内土用中のことし、晴暑風有之暮よし、弓矢多袴申付ル、小六・順吉・新作参ル、例刻出仕、竹内先生も先ツ無事ニて御門出候由、御組御人数入用最中ニ付無拠御差留、手附助吉・召連候医者も差留候、御旗本組下し　大御前様御上着次第罷下候様申達、諸役引、直ニ男四郎へ寄、内々相談いたし、帰より榊原へ寄、八ツ過迄食事不致候故割籠開候処幸御地走有之と申ニ付見候処、茶飯ニサク平、其外アジ有之給、日中不被帰、七ツ過迄噺帰、今日中世古才蔵大坂へ登候とて参ル、御陣中為御見舞折々出候者之由、御留守居代也、明日出立之由、暮過甚兵衛来ル、帰無間休

同廿二日

晴天気、風日々有之、塵煙のことし、御長屋内サリ〳〵いたしヱケマセン、権蔵来り、三内へ御地走持参候間被誘引参候処、遠月堂拵ダテ羽二重練餅風味よし、帰、明日御飛脚之趣、甚兵衛来ル、暮頃立見御飛脚着之趣、御書達有難奉拝見候、蚊張之内御用状抔見候て寝へしと存候処チヤンヶヶ始り見候処　御城ノあてニてホンと明、遠方ならんと存候得共無限チヤンヶヶニて又見候処御城近辺無相違燃立ニ付、権蔵呼、是より出んと支度掛、不残集不申候得共出ル、八代河岸（洲脱カ）へ直ニ参可申と道より権十郎殿伊三郎為走、直ニ御持場へ参候処、其挑灯奇羅星のことし、人馬如蟻、何方と相糺候処阿部駿河守と申、桜田御門より纔ならて隔不申、兼て聞及候江戸火事始て見、追々俣野市郎右衛門大炮組召連来ル、権十

郎殿・御物頭・市郎兵衛・爲弥御足軽召連来ル、竹内御組・御旗本寄合組二十七八人、一ノ手寄合組ハ火事場辺見廻り、二ノ手寄合組も同様、段々下火鎮火と相成候ニ付御城脇を廻ル、御物頭黒谷市郎兵衛・御足軽組岡田為弥・御足軽組・造酒助御組・竹内御組・御旗本寄合組・権十郎殿・大炮組俣野市郎右衛門、馬場先御門屯より日比谷御門出、上杉前通、米沢屋敷前固人数いつれ鉄炮備也、井伊脇半蔵御門・田安御門・帷子御門より入、一橋屋敷脇より御屋敷ニ入、夜は明、権十郎殿嘸空腹可相成と存候間御台所ニ焚出し申付置候間為受取候様被申候間受取向候処尓今出来不申と申聞候ニ付皆々帰、四ツよりの騒ニていつれも空腹と相成、早足ニて駈帰り、御長屋へ帰候処、飯用意も無之、誠大不間、彼是いたし候内一寝いたし目覚候処○五ツニ相成、夫より食事等いたし、甚ネムク難堪候得共出仕日、其上御飛脚立、昨夜達候書状ニて之御用も有之、頭ヲカキ〳〵出ル

同廿三日

○目覚し候処五ツ廻り也、六ツ半頃より寝候て五ツ御目覚、誠イサヽカナラテ寝不申故ホロケ候様也、例刻出仕

【第三十七冊終わり】

【第三十八冊】
（朱書）「冊八」

五月廿三日　閏五月四日立御飛脚十二日着ニテ十三日達

昨夜駿河守様焼失ニて八代河岸（洲脱カ）へ駈付、尤一組召連候、江戸火事始て出懸、誠タマケシ事也、上杉門前ハケヘル（ゲベール銃）持固候、其外ホート大筒押出候処も有之、大名出馬、火元見の早乗、火消し体、噺を聞より弥増候、乍去道懸念ハ無之候、御取締威勢もおそろしきものニ御座候、消し模様相成、諸家之固人数も追々引揚候故見斗御城御堀端廻り、百余之人数二行立廻候て御上屋敷へ帰候処夜明申、直ニ帰、例刻出仕、御飛脚立ニ付書状差出、榊原へ引取より寄、治兵衛隠居悔申、兵部殿へ参ル、明日本所御屋敷へ御家中連参候事ニいたし、織人へ寄、明日地走之事相談いたし帰、今宵十兵衛・山本権蔵参ル、権蔵より塩鳥貰ひ、私宿いたし、七ツ頃来ル、暮過兵吾来ル、噺中甚敷ネムク、皆々返し休

同廿四日

雨天相成候間本所行埒明間敷と長寝いたし候得共、断も不参候ニ付伊兵衛呼誘引、其外御物頭平兵衛・善蔵誘引、大手間取四ツ頃参候処、兵部殿・織人参居、伊平御備組・御旗本寄合組都合二十八人、一ノ手源大夫始二十三人、御手廻組二十一人、諸組合セ七十七八人来ル、雨ニて不面白、昼　上より思召を御鉢積被下○アシイモ様物積、豆腐汁いたし、昼前兵部殿一同へ菓子出し、昼後私菓子出し、織人も出し、其菓子如山、菓子壱両余分也、大遊セいたし、夜食兵部殿と私両人ニて致地走、肴と大根と煮・さし身・木瓜（胡瓜）鱠・蛤吸物・酒飯出し、八十余人ニて賑々敷事也、四ツ頃御長屋へ帰、昨日之ツカレ尓今不癒、早速休

同廿五日

雨天、三内も昨日参候間礼とて来ル、例刻出仕、今日は御登城御出勤、此頃御風邪ニて御引込、昼後引取、直ニ十兵衛へ寄、高橋重蔵も寄合組御番頭被仰付候間色々相談、七ツ過ニ帰、廿三日明出火出張余りニ不都合ニ付申合之為世話呼色々申渡、四ツ頃皆帰、休

同廿六日

雨天、四ツ過漸目を覚し、権蔵・市郎兵衛・新作・又蔵・林大夫・半兵衛・甚兵衛・鋼之助、獺ノ皮出来し来ル、暮頃迄客殿ハ不絶、食事済休まんと床延蚊張釣せ候処、男四郎より相談申越候書付有之ニ付考中、岡

吉夜噺ニ来ル、丁度十人来ル、内ニても男之子出、兄も悦来りしと申、色々噺いたし、四ツ廻りニて帰、即休

同廿七日

雨天、六兵衛・庄右衛門・楫右衛門・権蔵来し故御組相用ひ候位膳椀整呉候様頼、例刻出仕、昼過引取直ニ榊原へ寄、呼出候者参候ハヽ達呉候様相頼、権十郎殿へ参り、此頃八代洲河岸へ固不都合ニ付色々相談、夫々評決して七ツ頃帰、弓矢多襠高袴出来ル、権蔵へ頼御備相用候膳椀一式整遣置、見候処御組頭の膳椀より一段立派なり、半蔵我分立派過と申候事、あなた様御分ハ余悪敷、私分と同様ニ御座候と申候、寄合ニて権蔵参候間余過分過候と申候処、常例（ツイ）と申候、扨々御備抔ハ余り過分物ニ哉と申候、其外十右衛門・春治・又右衛門・平次右衛門、剛蔵来ル、明日又々権十郎殿誘引ニて両御組・二ノ手・寄合組・大炮方・江川勝の入熟（ママ）、彼是九十人余本所参候、雑喉汁趣向、又思召を以御鉢積可被下置候、其外ハ権十郎殿と私地走なり、天気甚無覚束、四ツ過休

同廿八日

鬱陶敷天気、雨は先ツ不降、五ツ前目を覚し、髪結居候処段々御組ニ被仕懸、其内五ツ廻り来ル、食事いたし、一組揃候ニ付出ル、明日兵部殿世話なから被参度と申ニ付、日用土瓶小振ニて不埒明候故本所二ツ目瀬戸店より整、御屋敷へ参候処御留守居中役・権十郎殿・役人先番ニ来居、追々二ノ手組・竹内組も来ル、権十郎殿・男四郎・織人・源大夫・十兵衛来ル、追々雨降出、七ツ頃迄大雨ニて雑喉趣向も空敷昼寝、昼は銘々割籠持参、豆腐汁のみ、上ヨリ御肴、名は不知、テリ焼・茄子・生姜・積物三砂鉢被下置候、権十郎殿と私出候地走ハ木瓜（胡瓜）鱠魚身入木瓜三百本・土鰍汁一斗（とちやう）・外酒飯、七ツ頃より天気相成、大御泉水へ舩を浮、七八人入慰、岸ニも大勢出、名所々々を遊覧、内ニは酒呑賑々敷、私共居候処へ大酔之赤沢隼之助・臼井兵介・岡田豹藏酔候て大シケリ、私庄右衛門へ用有之ニ付御玄関之方ニ参候内、舟と岸ニて鯨波声夥々敷聞へニ付舩より落候ニ哉と用済ニ元の座ニ参候処、舩ハヒツクリカヘリ、六七人余服之侭水中よりヲヨキ来ル、隼之助・兵介真先ニオヨキ着、如何いたし候哉と縁顔（ママ）居大勢より聞候処、舩はシヾミ、前森卯平治オヨキ不知、水ヲ呑、既ニアヤウキ様ニ見へ、大酔隼之助・兵介其侭縁顔より飛下り直飛込オヨキ着、隼之助ニ助ラレ候処と申、舩シヾミ候処深サ一丈位も有之、不構ハ死候処ヲ隼働感心々々誉、一同祝義酒盛り始ル、落候面々の脇さし塩水ニ入、柄鞘埒明不申候趣誠ニ気之毒也、酒呑も大シラケと相成、御組は廻ニて直ニ深川新宿へと帰、続て一同帰、竹内御組・二ノ手組一趣ニ相成六ツ半過帰、先ツ御役済、半蔵出、弓矢多さま御荷物着之趣申、聟林七泊候処無之候間不苦ハ止め申度と申ニ付可然と申、弓矢多へ明日鎗持壱人小一郎を差出候様ニと申付ル、大草臥ニ相成休

同廿九日

天気よし、床中ニ煙艸呑考候ニ付、先達て被仰遣候節色々申上候節上下も持登ルニ不及と申上候、訳は私余り余慶ニ持登候ニ付其内一ツ詰候て弓矢多為用可申と存、此節御備組御祝義有之ても不相用様ニ為致置候間、旁々不用之義存、尓今ツメサセジニ置候、甚差泥今日万一入用と有之候ハヽ、大事欠候事いたしと存候間、昨日着先荷物の引出櫃為見可申と半蔵へ申付候処鍵無之と申ニ付、私登り節持参之引出櫃鍵合候哉見候様申付候処其鍵無之、クヅカヒいたし起候侭ニて見尋候得共無之、無拠伊兵衛・兵吾手伝ニて錠前ヲハナシ見候処上下有之、大安堵いたし候、彼是大チラカシ起候侭ニて四ツ頃迄大不始末、最早大夫衆参可被申、大セリ立掃除為致最中隼人さま御出と申候得共大不始末ニ付不構置候処、三内参候由、大働いたし四ツ半頃漸片付候処、御出入之紀伊國屋棹まんち

やう持参也、御前様御着ニ付御門前へ御迎出候得共先ツ私所へ寄、其内隼人参候ニ付土産甘物開、茶ヲ出し候処へ兵部殿被参、続て織人も参ル、賑々敷事也、亭主も菓子出し、其内千住御立見注進ニ付兵部殿・隼人御殿へ詰ル、私・織人は甘物を給候て障子ノキレヨリ透見いたし、誠颯といたしたる大□□、九ツ半過御着也、直ニ御殿へ織人と一趣ニ詰、御祝義申上、御酒御吸物被下置候、一同引取御長屋帰り食事いたし、御書を二三寸見候処隼人寄、直ニ御上屋敷元右衛門抔一趣参ル、於御上屋鋪又々御酒御吸物被下置、同役衆より書状達置(カ)、見候処倉右衛門立之趣為知申越候ニ付即権十郎殿へ申述、竹内御組都合次第被下候様申達、大混雑、引取より安藤の宿へ是非参呉候様定右衛門申□、先榊原へ寄足延休足いたし、書状颯と無事之義奉申上候、安藤へ参候処即金子二十二両三歩慥ニ受取申、色々地走有之

一、□物鰯酢者　一、さし身　一、魚茄子煮漬　一、鱣玉子とふじ

一、蚫さんはひ漬　一、そは

隼人・多門・金之助・弥吾・紀伊國屋参ル、賑々敷皆々機嫌ニ相成、五ツ過帰、折々雨、弓矢多と久振ニて得面会、皆々様御機嫌能趣、子供達は遊候体、委細承り大慶不斜候、鱣地走ニて大食仕候とて大慶也、一弥太抔も振舞候由、江戸鱣之為ニ哉声抔カレ居候、如何成為ニ哉と承候処今少寝と申、道中ニて食物悪敷口叶不申と御供中噺聞大笑いたし、林七も呼遠月堂蒸菓子へ茶出し賑々敷、皆々寝所入、弓矢多御伝言之趣段々申聞ル、奉畏候、委細承候、四ツ過ニも相成候間休

閏五月朔日

雨天、今日之月次御風邪ニて無之、御曖気之由　大御前様も御逢被遊度、嘸々生長致候半と御意之由ニ候へとも丁度御不快中、当御座敷へ御出無之候、此頃駿河守さま屋敷焼失之節八代洲河岸へ御固御人数出余り不都合ニ付、取調掛手伝十兵衛・又右衛門・兵介来ル、新登組二十五人四ツ時御上屋敷へ詰候様申達ニ付弓矢多同道出仕、大風雨トテモさし傘ニて不埒明候故ミノ笠ニて連行、ミノ庄内持登笠は当時流行の雨荒之用便、冠行

一同集候故二番立着揃迄御旗本組心得相勤候様と申達、当分世話役都筑林大夫・吉川清兵衛・遠藤数衛申付ル、当四日より非常詰候様ニと申達、色々御用有之昼過(カ)漸帰、十兵衛・又右衛門・兵介調出来、新世話役林大夫・清兵衛・数衛参ル、七ツ過皆々帰、暮過より三内雑話ニ来ル、甚兵衛も来ル、四ツ過帰

東都荒雨降ニなし横ニなくる図

同二日

雨天、弓矢多・半蔵、売物(買)ニ出ル、弓矢多扇子整候由、半蔵は倉右衛門より万端得(カ)頼候て参ル、昼昼寝いたし、兎角人参、其内隼人来ル、七ツ過帰ル、○暮前丸子松斎弓矢多着之為祝鱣一重持参○暮過岡吉かた餅持参、甘く食し、四ツ頃迄噺いたし帰

同三日

雨天、弥右衛門・又右衛門来ル、弓矢多、林大夫へ申合ニて行、例刻出仕

○昨二日前夜より藤八立候義聞候得共不分〳〵と申ニ付二三日中ニも立可申哉と存候処、四ツ頃只今出立と申出候ニ付書認隙も無之ニ付無事罷在候を申上れと申付ル

竹内御組立ニ付色々混雑難筆紙尽、一ノ手へも九日より立始候様申達、昼過引、直助九郎殿へ為暇乞とし参り、榊原へ寄食事いたし、餅取寄食し、廻り番繰之手伝ニ二ノ手世話役大勢来居、七ツ過都合直し帰、暮頃権蔵来ル、伊兵衛菓子持参、五ツ迄居帰、伊兵衛へ頼置候弓矢日蔭町ニて整しと申、近日幸便次第子供へ差下可申品々整置候

○伊兵衛、弓矢多頼置候弓矢整来ル

同四日

雨天、弓矢多非常詰へ参ル、造酒助ハ床中ニて書状颯認ル、例刻神田橋へ参ル、道こしあんのことし

一、毎日雨ニて往来何とも閉口ニ御座候、中々蒸あじき事ニ御座候

一、今晩定右衛門・伊兵衛立ニ付案内いたし候其外

一、君御不快御宣、大溜りニて竹内御組へ御意達、出座いたし居候処、後人有之ニ付見候処御覧被遊居候

【第三十八冊終わり】

【第三十九冊】

（朱書）「卅九」　（朱書）「閏月九日林七下りニ付同廿九日ニ達候」

慶応元丑閏五月於東都柳原御屋鋪認

閏五月四日

雨天、詰日ニ無之候得共竹内御組俄立ニ相成、今日御酒・御吸物被下置ニて出仕、大混雑、昼過引取直ニ榊原へ寄、御備組之義相談、十兵衛と壱趣本町通り、雨も晴、十兵衛ハ両國廣小路より翁塩整東ニ行、我ハ浅艸目付通り帰

今晩榊原より定右衛門抔参候間噺ニ参候様申事ニ御座候得共、伊兵衛是迄色々世話ニ相成、注文物不残伊兵衛へ頼候ニ付今晩参候様案内いたし置候ニ付断候処、定右衛門一晩噺度趣申聞候由ニ付、左様ならハ幸ニ付我御長屋へ参候様申て帰、夫々料理方申付ル、追々客来ル、寺内権蔵初摘白少々土産、八ッ過十兵衛、三番ニ多門・北村蒸菓子、四番御供小始（姓）小大夫柳橋産つくはね壱袋、定右衛門・秀策焼麩壱包、隼人・三内父子・鍋之助を呼、獺之毛抜礼（カ）、紀伊國屋利助松之寿し大重箱ニ入土産、大客也、亭主地菓子（走脱カ）柳橋つくはね、茶ハ十八□（両カ）、吸物大コヂ・鰈ニしゆんさひ（尊菜）・めふか（茗荷）・蛸ニ茄子一砂鉢、柳橋鱣、一同大酔、多門抔ハ足元奇妙大笑、出格子見候へハ屋形舩引も不切、チン〳〵めかし、別て興も有之、五ッ過一同帰、直ニ伊兵衛へ暇乞ニ参り、万端世話ニ相成候礼、書状も不遣候間かゝへ宜敷、大笑いたして帰、即休

同五日

天気よし、石原組一番立、村井五吉・伊黒藤右衛門、都合五人着、逢候て少噺いたし神田橋へ参途中大暑汗流ふき出ル、帰候迄弓矢多非常詰引不取、途中ニも不逢、御備組若衆ニ付非常詰帰ニは白玉汁粉等食し帰候間、嘸茶屋ニ寄候半と考、竹内組立初大取込、其内ニ石原二番立、江口四兵衛・相良勝之助・山本常治・相良列右衛門着、一ノ手寄合源大夫始二十三人へ当九日より都合次第罷下候様申達、早速書付数十通差出、其大混雑閉口〳〵、一ふく吹出して鬱気散、漸荒方達、持出候て諸役所昼過、我ハ八ッ過引取、直ニ男四郎へ参り色々相談事有之、茶五六盃呑、榊原寄、汗ぬくひ、二階ニ上り源大夫呼出、十一日立ヲ御差留申達候由御座候、御用人ニ相成、高橋金

蔵十兵衛と色々都合ニ相成候様相談、七ッ半過定右衛門へ逢、伝言を頼帰、新橋ニて挑灯迎ニ参ニ逢ひ暮帰、添状取ニ不参候ニ付白井専吉呼出、添状等相渡、三内へ用事有之参り、四ツ過帰休

同六日

曇、甚兵衛・角之助・鯉兵衛・萱野正助・角田儀右衛門・又右衛門、昼迄政事、源之進来ル、又右衛門・兵介来ル

昨日落

一、帰候て弓矢多遅く相成候事聞候処案之如、引取より茶屋ニ寄飯を食候趣

一、柳橋ノ名物ツクハネ菓子為給候処、食させ候て慰

庄内の茶菓子風也

中ニ紙入色々面白事書

不知給候為紙とも不残食　大笑いたし

一、石原家来、白川の先より日遅ニ相成候ニ付御待不被下様ニと申遣、清川ニて逗留人馬大込ニて大おくれと相成候間、尚飛脚立次第用意候事半蔵迄申遣、私登候頃は五十両ニ登候所此節七十両ニても六ヶ敷可有之と申事ニ御座候

一、将軍家御進発大坂之処駿府より京都と被　仰出候由

（図26入る）

門叶勇来、馬具師暮前より来ル、刀革二ツ、泥障緒二通り、馬セン二ツ、鉄炮背負革二ツ、腰さし小柄杓一ツ、カラミ鎗柄申付、六ツ頃帰、御組追々参ル、四ツ過帰

同七日

雨天、弓矢多来り、昨夜深川へ廻り仮宅女郎之張候処見とてキモケいたし故日記を付下候様ニと申付ル、同人申候は是より同宿申合他行、おと様の茶を調申度、外子供二人へ小燈籠整ニ参候と申、林大夫如何申候処、参候積之処家来脇方へ遣候て御供ハ不相成申候と申聞候、扨々困タ世話役也、林大夫へ早々只今参候様申遣候、弓矢多抔ハ門出、林大夫来候間此節御備竹内組ハ下、一ノ手組は下被仰付、三日休中残三組ならて無之、今日　御登城、宅非常持、御供詰ハ我御組、貴様達ハ非番候得共万一非常詰より御人数又ハ当御屋敷注進有之節ハ非番より遣候ならて無之間、兼て被得心、他行いたし候者ハ無拠候得共能々被入心候様申達、例刻出仕、今日は一ノ手下被仰付候ニ付不残御意之上御酒・御吸物被下置候、賑々敷大混雑、多兵衛壱人ニて大込、無拠達面又は添刺・性名、自身御組頭ニ相成又は書役ニ相成、石原組四番立加藤与市・北楯金之助・村上金作不残着揃、頭着相分不申候、漸八ツ過迄ニて大込相済、引取より榊原へ寄、今日　殿様御登城御戻御食事相済、柳原御屋敷へ初て為入候、七ツ過より隼人・男四郎と権十郎殿噺ニ参ル、五位鷺汁生候て始て給、至極結構也　鰍煮漬地走なり、風雨、色々御用談し五ツ半頃帰（図27入る）

一、御進発後大違、人不足ニ相成

一、先月十日、長州勢小倉押寄大戦、小笠原勢敗最早落城ニも可相成処、細川家人数兼て小倉へ加勢として屯居候ニ付夫より人数操出、大合戦と相成、長州勢敗軍、細川勢勝ニ乗下ノ闘乗取候由、追々薩摩・鍋嶌辺人数操出候由、書付御小性頭衆持居候得共、此節沙汰ハ油断は不相成候間如何可有之哉

同八日

雨天、弓矢多只今より非常詰参ル、昨日他行いたし整候とて茶四半斤、筒ハ八半斤入整、私前ニて筒へ入候得共筒小サク茶多く入不申、田舎初登と感心いたし候、無拠平常私用居候筒へ入申候、其外燈籠三ツ、筆等整来ル、林七へ誂候、神田橋へ参ル、甚兵衛・水之助来ル昼過、三内・

庄右衛門来ル、甚兵衛又々大イソキニて来テ只今下谷へ参候処、倉右衛門殿荷物訳山来り、誰も受取候者も無之と申聞、半蔵呼、右之噺いたし兎角参候て見候様申付ル、倉右衛門着ハ明日ならんと噺いたし居候処半蔵帰候て倉右衛門只今御着之趣申越ました、是又大イソキ也、とても只今と申事ならハ率馬等出候事千住迄出人も不相成、却て無面例（面倒）入物なくよし、乍去飯等之事不都合無之様ニと申、半蔵大勢召連大騒ニて又々走行、其内手附之孝治来り　御隠居様初御一同御無事と申聞、倉右衛門さま神田橋より御帰御寄被成度、押付御出ニ可有之と申ニ付片付置、其内倉右衛門殿来り、久振ニ逢、道中難義噺、又庄内之模様聞、歎息いたし、いつれ緩々とて帰ル、暮候て岡吉来ル即帰、三内寒晒たん粉拵候と申ニ付参ル、庄右衛門・甚兵衛大働ニて拵居、給候て五ツ半過帰休

同九日

夜明迄雨晴、岡吉只今出立とて暇乞ニ来ル、林七へ頼積書状誂候、林七も長々難有とて砂糖二斤為礼出し、是又暇乞して支度

林七下りニ付奉伺御機嫌候、私無事奉申上候、尚奉期幸喜之時候、

以上

松平造酒助

御両親様

【第三十九冊終わり】

解題にかえて

本日記のかな（カナ）表記の部分には意味が判然としないものがある。列記すると「タシキ掛」（75頁上段）「ヤシリ」「おむし」（81頁下段）、「ウシヘリ」（89頁下段）、「ソクネ」（95頁上段）。「カリハサシ」（76頁上段）などである。このうち、ヤシリとタシキ掛は前後の文脈からは「鑢」「襷掛」と判断できる。いずれも「す」となるところを「し」と表記している。この〈す→し〉を他にもあてはめると「ウシヘリ」は「うすへり（薄縁）」、「おむし」は「おむす（御娘）」であることがわかる。79頁下段の「居」は「据え」の意味であるがこれには「シヘ」とルビをつけ、ピストルを「ヒシトール」（78頁下段）と記す。造酒助には「す」は「し」と表記した方がその発音に近いと認識されていたのであろう。自分たちの話し言葉の発音をかな表記しているのである。これを敷衍すれば、「カリハサシ」＝軽業師、「ソクネ」＝損ねであり、「イキマセン」（92頁上段）＝「よろしくない」という意味の「いけません」と理解できる。訛音が表記されている所はこのほかにもあり、日記を読み解くうえで留意しなければならない。

なお、五月に出府してきた「大御前様」は現藩主忠篤の父で引退した九代藩主の忠発のことで、「お鉚様」はその室。弓矢多は造酒助の弟。

付記　本報告はＪＳＰ科研費JP18K00951の助成を受けた研究の成果の一部である。

図１
元治二年正月十一日
於大溜ニ御行列
以上御具足餅被
下之図

図２（右）
於御居間書院ニ
神酒被下図

図３（左）
於御居間ニ
東照宮御象拝見
被仰付御酒頂戴
御具足初て拝候
図

図８
三月二日
王子遊行図

図９
扇き屋にて
酒興之図

図 10
日暮しの里ニて
遊芸見ル図

図 14
上野社内
花見風画

図 15
□嶋桜花見
遊興風画

図 18　三月廿三日

図 17　三月廿三日

図 25　五月十九日

図19　南大風雨

図6　二月廿三日

図24　五月十五日

図７
二月廿九日

図４
正月廿四日

図 23　造酒助飾道具左印

図 27　閏五月七日

図 20　酒助怒テハイヲ誅伐之図

図５
正月二十四日

図 12
徒然余障子
切レヨリ燕・屋形
舟見独考図

図 11　初音薮

図 13
焼蛤大食図
三月六日夜

図 21　四月十四日

図 22
ものくさ太郎夜頭を叩て歎息之図

図 16　馬大入

図 26
昼頃より天気晴、
御長屋ニ居大暑凌
ノ体